

# 思忠志集

二

葉

庫	文	閣	内
九	三	二	和
〇	四	九	書
函	五	冊	
	四	號	類
九	九		
架	冊		

内閣文庫	
番號	和 34549
冊數	22 ( 4 )
函號	190 181



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

未正月廿三日

き用并療治

一先家方ヲ可治其内誠ツサキメテを欲ニテ息又々  
 初家迄トモガウノノ君ノ人ナリユメクワガモノとおも  
 有由スヘカラス人金銀ヲルニモ同意キヨウスルトモツモ  
 シミツモナカシ家ニ内ノモノ他ナチアラシニヨイテ公定テ  
 持メナラシメ悪人タリトモ家ヨカラハ悪カルベケシバ至  
 極ニ悪人タラバメキニテフチスルモヒガエ下也極ニ悪人  
 又ハ此玉エタイシハ世ニふ悪悪人ニ味ノ上ツルお悪  
 上シモソラヒツルテ上下シテ下ノ病モヒガメキヨロクニ  
 此キヤウギヲシサメ又レバ大形物イワストモ後トモガ  
 シサニルベケレトモ物イワサルハカリニテハ彼人ヲサガメ  
 甚上ノ自分モ我ナクテハヨウノガウニ我様ニカキヨ  
 他人ノ心ヲ大おももモノ作ヨケルモモモモモモモモ  
 下ヨリツラモニリキ度クイハセ及その其のウエニ種

テムサボフバあヨリ上エホド其ノ教改ニカリトドシテ  
ロリニスベシカヨリニ施モノハ別リモ力ヲモ微キホ  
メヌテ合者ハ人ソエ子モナリノ和カハ改ニテ流リヨシ  
エトヨクメカケルンベカラカハあるハアリカルニヤカ  
彦又

但人をガレノハガクツラサムルガ人モカクツラサムルモ  
ニ善ニシ自身モカクツラサムルモノ毒ヲクエトモ  
ラガレ抑ニクワホウ度出シタルモノ自カ

ホキヨコシ我カスハスキナルエトモ人勅後カ下ノ  
ヲモイヤリウスモ當ワキ心ノ甘ニ氣ノ日其思モ  
ナキ人ノ身エノアチメモツタリナキトモ病モナク  
ヨワルトモエタリホホ物ノホホ物トエテス  
上エテツシタリニ先ノ物ヲホホ物トエテス  
るヲヤスルニ先ノ物ヲホホ物トエテス  
ビルナリヨリ人ノホホ物ヲホホ物トエテス  
ヨクカスモホホ物ヲホホ物トエテス  
ホホ物カレホホ物ヲホホ物トエテス

寛文七年正月廿三日

田三九

人モガクツラサムルモノ毒ヲクエトモ  
故ヨクカシテホホ物ヲホホ物トエテス  
イカラカシテホホ物ヲホホ物トエテス  
慈心ノホホ物ヲホホ物トエテス  
ナヒクバケレホホ物ヲホホ物トエテス  
子トテモホホ物ヲホホ物トエテス  
カナシニホホ物ヲホホ物トエテス  
ニテモホホ物ヲホホ物トエテス  
ニテモホホ物ヲホホ物トエテス  
カシナシホホ物ヲホホ物トエテス  
エホヨリ付テホホ物ヲホホ物トエテス  
念比スレバホホ物ヲホホ物トエテス

クナニテシタシニ遠をアハルニ去ニヨリテコソ下ニニ  
本人をスグレ分カギリイヤガウシ遠ダテハコソイニシモ  
ルモあま家カワリツキヲモカバニニテ足時ノハカ  
心ニアイトク扱ニハカリガメキヲるたえ心ニサハサ  
悪ニヨリテモ之態ハクノ心リウスレズエメ心ヨリ  
スベカラズ心ニシタカスモノナレバ人柳時ニ  
極ニシタト入ツキアノシクウ五成迄モ  
まなバナロフ義肝要タルベキ也  
但大國ヲサムルハト突シまればトシ小キ家ニイテ  
此心時ニ随ベキ也

寛文七丁未正月廿三日

禱之門同根源古哥

郭公人言若菜のお母か家り  
まなまくるあ一吃一声そま  
にウサワイノ門古八是也ワサワイノ根源

三百廿一

短意古哥

いとあいの想中其の松行くらみ  
あといちちちち抱ぬの持扇  
短意ニテまあコトアリもいらくるるる

三百廿二

任取古哥

水原野のなほみせ川の河院  
鴨りあなる山雲みし

三百廿三

不盈古哥

川と不盈古哥  
川と不盈古哥  
川と不盈古哥

三百廿四

うすし心不私古哥  
うすし心不私古哥  
うすし心不私古哥

三百五

あるはおもむいさへして...  
 乃平... 月夜... 心...  
 三百五 (横心古豆)  
 三百六 (月)  
 三百七 (末正)

寛文七年十一月廿三日  
 末正月廿三日  
 初少之時教員

一初少之時教員...  
 御方... 教員...  
 一初少之時教員...  
 御方... 教員...

ある時... 於... 京... 都... 幸... 也...  
 おの... うち... へ... 奉... 付... か... へ... 手... 宛... る... だ... だ... の... あ... り...  
 一... 舟... テ... 人... の... 由... 風... 烈... 意... 燒... 亡... 意... 得...  
 一... 舟... テ... 人... の... 由... 風... 烈... 意... 燒... 亡... 意... 得...  
 一... 舟... テ... 人... の... 由... 風... 烈... 意... 燒... 亡... 意... 得...

一... 舟... テ... 人... の... 由... 風... 烈... 意... 燒... 亡... 意... 得...  
 一... 舟... テ... 人... の... 由... 風... 烈... 意... 燒... 亡... 意... 得...  
 一... 舟... テ... 人... の... 由... 風... 烈... 意... 燒... 亡... 意... 得...

一... 舟... テ... 人... の... 由... 風... 烈... 意... 燒... 亡... 意... 得...  
 一... 舟... テ... 人... の... 由... 風... 烈... 意... 燒... 亡... 意... 得...  
 一... 舟... テ... 人... の... 由... 風... 烈... 意... 燒... 亡... 意... 得...

寛文七年丁

道身ニ欠ウツリ土瓦焼失モアリ大キ  
也此欠ニハなノ外モヨリ汝等

一塩 推量可不可

地形スルハ山名ノゴトクカタリ  
吟味ノ上ニテ結構也地形也  
石瓦ナドモヘゲ換ル分カゲ  
粉ニシテソコ子以雨ノカ  
子トイ推量可不可

一先祖代ニシテシテ依忘至思不知家職

一先代トキキウコラ仕タ  
思ミテルヲ我急カ  
バツトウクル我急カ  
先祖ノツキタルカ  
ノ東恩トモ是也  
水出其後長ク早魁セリ又  
續勤無常因敵變化ストモ云  
如

此ノ心アゲテふ可救其則不遠ヲ遠ク思ヒ遠キヲ近ク思フ  
面自カフ見ニナズニ遊ビ命ヲ失カズモ忘レ悪ス末ラシ  
更ニソモ知ハ思ニ思ハススキ有也ワザワイラニ子クサカ  
千語ニ服アラズ

善惡進心  
三百四十二

一本心ヲ守ルニ善心後シテ善心遠カラズ  
一おのりヲ抑カテ身立衰

徳ヲモテ知をのづらう背有也  
未だ徳ハ所カシ惠陀守自

我々もよく抑ニ行づくニ善心  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ

心ヲ入ルニ善心遠カラズ  
心ヲ入ルニ善心遠カラズ





保命不疎於人

寛文七年丁

一 傍にミダエヨクそナリ心懸能く死せざれば極時相死  
 ソソミテハ能スミヤカニ死スル物多スベシ是ナク切  
 シ能知能あトメを以テ布衣多クニヨリ未リサ  
 リ至極ノガレ又ハシラヤニメグ知故ニ  
 ナリハシロル有ニ卦ニルシヤル程ニ叶養  
 せせば他人ニミラシ直親子又或ニ親類ニ  
 極小人百他他人ニ入ラシトナレバ  
 極小人百他他人ニ入ラシトナレバ  
 一 其心懸能く死せざれば極時相死  
 一 其心懸能く死せざれば極時相死  
 一 其心懸能く死せざれば極時相死

未付及比

生大切

三百五十二

三百五十三

次心煩心

一 教方人ニツクムリ一人ノ命ヲトラントスレ共終ニテ  
 ダテカンナシク口ウシテモ死シノガレト思身ノ為  
 家ノ指ノモ命ヲナガラエ休合ヨラシトシ思  
 スハ大ナリナリナリ命ヲナガラエ休合ヨラシトシ思  
 一 教方人ニツクムリ一人ノ命ヲトラントスレ共終ニテ  
 ダテカンナシク口ウシテモ死シノガレト思身ノ為  
 家ノ指ノモ命ヲナガラエ休合ヨラシトシ思  
 スハ大ナリナリナリ命ヲナガラエ休合ヨラシトシ思

井ノ本

計五十四

萬本ノ可意得

一 善人却遭災明審  
この頃の世のきよきと云ふ銀を以て自らを  
する友木まねくはあつて我と命小  
かさうんぐ其てさうおきんともさう  
まよりのらん心あつて人として小おとらさの  
想子人六月にして内徳の如き人けし  
の外さるのゆいといからさうともして  
ふへあうさうさうちさまの出入り志水  
かひしはま扱本の極きと、教政入丹  
といつともかへつてちりのをせさるるを  
まればさうさうさうさうさうさうさう  
て対しとみへさうさうと種と信しむつてはけ  
不也

計五十五

善人却遭災明審

一 善人却遭災明審  
右と通三洞初ヨカラ上末をてサイ時刻来  
をを此能ハボングラカるハぬらあ  
とも心のたけりしと知なむ其の上  
い毎ハサレハんべうラサレ也  
未お前日 賢愚之察從當座心得  
一 愚者と云ふ身ノ痛ハ知ハ  
來ハ遠カラシ 地を其下ノトセガウ工教ヲ

推

寛文七年丁

慈愍を以て後世の痛出言スルハ云其由也  
及カキキヨル心遠クテ其末迄ハ行所  
却る二心モ如しと云其末終ニ去所ん  
南ノ心ヲ以テ長クナシおそく極小也

未八月廿六日

鑑幕ホ付函書

未の月廿六日

孝子植

ヨロイ

一玄人得傳タルモノガタリニ遠く着スルハトヨリ  
先ニ用ベシヲトス六ス子アリテ其下ノカタク  
久ビ身次ニ上ノ徳リヲ用ニイワレモ如ク授  
少子ノイハセシカクルニ此メスセノ方ノ徳ニヤセリ  
掛ケスバセハ人サシユト中ユニテ其テセ大工カ  
カニリハシト云外ニリテ云トナリニシハ

三百五十九

孝子植

孝子植 又行悟 兩首咏奇

忠恕 持滿 温樂

不生不滅

父之庭植 合歡觸念

孝子

母之庭植

萱中七心憂

シラシラノネト也

三百五十九

孝子 母之庭植

善政

一ノイ王ソシラキ ロクニシテ 國民ヲサシリタル代ハ米ヲ下直  
イカホドニシタルト云テツモリシル由愚ナル世ハ下ノメクニワスキ

寛文十七年十一月十日

故知行取ハ當分米高直ナルヲ言フ君ノ爲ヲモイカナシニ

又様ニ成行ハ七國ノモトイノ思但米下直ナラズ人欲ウスカルヨリ

一心に顔セモ口上モおとむくものむバみとヤラある母ハ人派

徳地の道おとるをぬれをぬれを徳地ノ道おとるにむく江ぬえ

にむく江ぬえに清不巧るべしホドク内ニ付るも理ニ應ぬれ

欲深シテハ誠シリガタニ實ニナケルハ心法靜成事有

三音ナニノ相閉邪存誠  
ホナ月正の相閉邪存誠  
欲深シテハ誠シリガタニ實ニナケルハ心法靜成事有

へかうホカンジ又レバナシダヲシルヲスアルジモ内サニノモノノ勤ヲ

有てニ元和谷と云べし徳ニ實ニ時ニあいておれん

是玉ヲミかくノイナリ行ハタトエテ云ハ寺ノ邊のヨシニ

經ヲヨムトソマ

三音ナニノ相閉邪存誠  
未十月  
居家必用曰無益五箇条

居家必用曰

一無益之事不可爲謂如賭博籠養打毬踢

継放風禽等事也

寛文七年

三百六十三  
丁未  
二月始

弘法大師十五無益

酒ヨイノキト

一大事異見 一上人短 一酪酏物語

一衆會大食 一遠路賊室 一不習醫道

一夜行惡言 一下戸敷盃 一老老出仕

一出家腕立 一愚者教化 一出仕雜談

一隔心推参 一貧者見物 一無心所望

未  
三百六十四  
十二月六日 進醫道

志孝ノ勤為醫道ナラズバアルベカラズト有時ハ父母

半々求身遺躰父母キアラズト身之保養モ可成

兼ハ子に醫道ノスレテ慈悲ノ孝ト云ヘニ孫彦工継モ

同意是比皆忠ヲおもふ故也

一孝子云曲則全枉則直夫唯不爭故天下莫与之爭

一夏禹治水治天切アレト旨酒ニシタル切ハ水ヲ治ヨリ一升リ

水ワサハイヨリ一是シキ故也

寛文七年

三百六十七

禹女儀狄酒作始禹是イシメ給トナリ

一曲礼之貪者不以化敗為礼老者不以筋力為礼

丁未二月十九日

一茶用也常行也此たるものヲ火ニテ煮ニおろしひざる内

あつくも不覺どもホシスギ又バあつく成具ましくカバヤシ

タトエヤチズ其よこるべしとろけヲをらふ相應の茶と云

又ハ行勤利ボラ云ニ七萬事ニ付徳も過と不及有也

或へハ一をさすニあけをさしりてくさるこ

人キケリテ又スニ云

家語云歎也窮則攬鳥也窮則喙人窮則詐

論語人窮則時ヨシ盗ストア是ニ禮義生於富

是盜賊起於貧窮

一聖人云凡夫賢有所不知聖人愚無所不知

一生付死待せて沖の心くこをるるあれもいり

一程子曰今丈海水潮日出則水涸是潮退也其涸者已無し日出則潮水復生

却不是將已涸之水爲潮水自然能

寬文七年  
三百七十八  
生也

一六韜云春道生百物榮 夏道長百物成

秋道歛百物盛 冬道藏百物靜

盈則藏則復起莫知所始

三百七十四  
一生ハ生スル處佳人間居住老身ト成處異病請

異形處滅死去ヤ

曲禮志不可滿樂不可極

十二月廿六日 人仕

心ヲシテハ敵モナシ其内ツカケルトモカラスナラニキ

ルベシエガミタレモノモエガニスガシ多モノモ善ニナルバリア

イナキ万角シラレスクナルヲスカバイヨハロクニナルニ初心

酒醉 酒醉ツカイヒガニセアクハトナサンハ不便成子ト

一酒醉 律生礼賛恒以瞑善毒害火禁燒智惠

慈悲善根

三百七十八  
酒戒十三ヶ条  
一般若論云佛告難提云酒有多過

一賞賤ニ多病ニ多評四無恥五惡六少智七所得

不得八自説隱事九作事不成十秋本ナカテ少

十二色ヲ懐十三不敬又ノ所トモニ此何チタリ

三百七十九 酒戒

一酒ヲトリテ人ノニセタ人

梵網經心地法門品云過酒器者飲酒者五百世

無半何況自飲不得教一切人飲及五衆生飲酒

況自飲酒

一 蓮子離毒下禹惡者酒而善言

一 在堂後世ト云ハアルト思後世教

カリキ教カタツミラ又心地出ル也

三百八十一

小智大智替

一 莊子小智不及大智又曰大智間と小智間と

定大間と間と云高智量大小不同也

實生眼

實生眼鳥賦小智自私チ賤彼貴我

一 天賦形乃大賦聲一人傳虛百人傳實

シロカナルモク佛神之寄瑞シキミテ示れり也

ろくろく一塵ノ上ニ空ツカヤぬるゴロ

三百八十三

考推

一 又さ内く推シ不知之爲知之是論篤而

龜莊者ニテカヒ

受用他智

一人智惠ヲ可請用後ヲ專トセン我今迄ノ智事ト

付イツトナク人習允故ナリ然ツ人ノ思ト不思我ト

寛文八年戊申正月十四日



知タルトヤラモフ其知タル事<sup>○</sup>又毎ヨリ得請先智惠<sup>○</sup>  
少スルト不可有具止<sup>○</sup>永身ヲ清<sup>○</sup>テカニシテカセシ  
リゾクナバヤカリ止<sup>○</sup>邪ナリ心靜ニテラシ清淨ノ心  
惡事ハウツルベカラズ善ハ曰<sup>○</sup>テアイモヨラシウツラン思  
者モ千多<sup>○</sup>一徳アルノ者ニテシテ子ノ年アソビキシテワ  
草木ニ至<sup>○</sup>遠<sup>○</sup>心ヲ派<sup>○</sup>其生付<sup>○</sup>行作ノスナクナル者ヲ能知<sup>○</sup>  
一一生ノ門のおくれ萬<sup>○</sup>有其時<sup>○</sup>至是第一ノ下ノ思  
可勤<sup>○</sup>晚<sup>○</sup>ニテモ可行ト思共可成テラバ胡可勤其  
無理延ハ一生ノおくれ<sup>○</sup>成<sup>○</sup>テラト心得ベカラズス

寛文  
三百六十五  
戊申正月  
一

ヤカニ似合<sup>○</sup>勤ガ本心ノ間テメノユダシ不可在也

一人無<sup>○</sup>苦<sup>○</sup>樂<sup>○</sup>城<sup>○</sup>能<sup>○</sup>復<sup>○</sup>是<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>能<sup>○</sup>ク<sup>○</sup>可<sup>○</sup>知<sup>○</sup>復<sup>○</sup>不知<sup>○</sup>一生  
送<sup>○</sup>生<sup>○</sup>得<sup>○</sup>名<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>モ<sup>○</sup>ナ<sup>○</sup>リ<sup>○</sup>復<sup>○</sup>不<sup>○</sup>知<sup>○</sup>智<sup>○</sup>惠<sup>○</sup>人<sup>○</sup>又<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>物<sup>○</sup>知<sup>○</sup>又<sup>○</sup>ハ  
無<sup>○</sup>智<sup>○</sup>惠<sup>○</sup>又<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>聖<sup>○</sup>人<sup>○</sup>言<sup>○</sup>不<sup>○</sup>知<sup>○</sup>似<sup>○</sup>合<sup>○</sup>能<sup>○</sup>存<sup>○</sup>事<sup>○</sup>行<sup>○</sup>者<sup>○</sup>之<sup>○</sup>  
行<sup>○</sup>作<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>可<sup>○</sup>見<sup>○</sup>無<sup>○</sup>苦<sup>○</sup>ヤ<sup>○</sup>ラ<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>樂<sup>○</sup>息<sup>○</sup>災<sup>○</sup>成<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ヤ<sup>○</sup>ラ<sup>○</sup>思<sup>○</sup>案<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>  
相<sup>○</sup>欲<sup>○</sup>離<sup>○</sup>可<sup>○</sup>樂<sup>○</sup>又<sup>○</sup>慈<sup>○</sup>悲<sup>○</sup>心<sup>○</sup>深<sup>○</sup>可<sup>○</sup>思<sup>○</sup>寢<sup>○</sup>覺<sup>○</sup>起<sup>○</sup>寢<sup>○</sup>  
生<sup>○</sup>死<sup>○</sup>死<sup>○</sup>生<sup>○</sup>息<sup>○</sup>災<sup>○</sup>有<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>願<sup>○</sup>能<sup>○</sup>合<sup>○</sup>点<sup>○</sup>事<sup>○</sup>本<sup>○</sup>意<sup>○</sup>以<sup>○</sup>

三百六十六  
中正月十日

一 去小僧方<sup>○</sup>知<sup>○</sup>有<sup>○</sup>モ<sup>○</sup>見<sup>○</sup>在<sup>○</sup>六<sup>○</sup>門<sup>○</sup>番<sup>○</sup>才<sup>○</sup>付<sup>○</sup>耳<sup>○</sup>鉄<sup>○</sup>炮<sup>○</sup>棒<sup>○</sup>

三  
同  
十七

千ギリキニテ不奇能致育者見蘇共門不入  
福人來共追出故其小僧智惠自滿養生金之  
持マウモ已心殺人ガテヒラシテ獨心ガナリ満乳  
振ヨリ終人間界背鼻高自怒十面作リ  
天杓成見タリ能者去ハ普人不捨用天地一  
可申我珠心清靜シテハ善忍也請込共能  
一懸ニテ善る忍善心肖故自門外モ不可來者  
眼前之事

寛文八年戊

申三百八十八  
正月十三日

兵法心付

一兵法一其之茅一カト今日心付俵武士タラシモク  
不意ニゴロサルト其是非ナキ死ハ存俵無尾油  
断ニテゴロオルカ午負俵ト云共一生アカリナリ  
兵法太刀討ホ心得タラシモノハフカリノ死アルカラス  
是兵法知トイワシタトエハ先代古人エガワノシヤウ  
ビタ暮ノ比ヨリカカリ收取タルニ誰トセシムズシヤウジ  
ゴシヤイバヲ以ツキテクテニス走出見共行方不知  
ツクレ名マトワナケ共油断故少もムカト  
信綱之丸キニキ是兵法ウトモ故相又カ

六曰慈悲有テ善事シ行輩ハ災難ニアラズト思共

古語ニ人多則勝天天定亦破人トイフ一ト惡事アリ

トイ(比天ニモ一度ハ勝ル由ク有る也)

七曰善人ハ惡人ノ氣立シ不知ヤリ惡人ハ從以善人ノハタメ

不知キラフ誠ニ哉善ト惡トハ敵シタル水尅火ト可也

得事

八曰恩シ見せ我ハ理ト云(比能ナシ者之我故ニ日教人住

居シセンハ是モ款タラシ仁ノ道シ可心得事)

九曰人々大形欲深故惡後シタリハ善シ進メ用テサカニテ

レハ急ニハ(急カタル) 結句 惡音シ催ノハ惡シ導ニモナラズ大

火(時ニ不應水シカケルカ如シカ)ツテ真意ノ端モ(上ルトニ

一)イ

十曰能人ハ惡鬼着テ客シタカル有之有ニ鴉鳥ノ付タラ

ニ心地モスレ板ハ州ニ不應善人ハ短命ニモアラシ麒麟<sup>ケルイテ</sup>為出時<sup>キ</sup>

孔子ノ言モ可聞事

十一曰惡人ハ善人ノ款善人シ可客亦善人ハ惡人ノ款タラズシ

比惡人シ我友ニシ善人ニシキハト思心有故ニ客スルハ

希メル事

六百九

一 柵尾明惠上人 詠<sup>詠</sup> 明惠上人可有様之詠<sup>詠</sup> 奇

寛文九(三百)年

ソリカニ一切経ヲヨミシハアル(キヨウノ六ノ字)

此心ヲ付私セズ物心無ラセシカク心ニシテトシモ  
 エトモ年ニテイロワ子バ冷ラシラガルヤウニ我ニ其身ト  
 イエトモシテエラセ子バ不知事アリイロ年ヒ子ルハ  
 アニノ法年足ラウカセト氣血ヲ知シテ又ニ元様ニ  
 セテカ懐テナドイツカニテモ血氣ヲ知シテ子ハカキ  
 時ヨリモ病ノ来クニ前之通ニ療治スベシカキ  
 トコロ有共先サスリツ子リナドシテカキヨリツサメ  
 寛文 其ニテモ 女ハカリトモ之萬ラ不違様ニ保美良ニ  
 戊申 三月九日

生死心得又省長老之詠

一死安

死をト思エバ死シ死サルト思エバ死ヌナリ 相此無ハ

聖人ト云トモ無ク成ニ不取人無ニ得生者器物  
 至近何カ可ニ滅哉

有古歌 ヲラ老ノ詠歌ニ

祖父祖母曾 祖父祖母 祖父其儘ニ生テ居タラハ何  
 ヲ喰セシ

善

死スハ目出度事ニ復可悦義ニ

悪

死セサル様ニトテ死スルヲ嫌ヤ

筆法 喻 氣血滞

一筆惡ニテ云ケバ年クタル方心ガナワサレバ氣とニある

三百九十三

と斗ノミハ交ハレシニ如テ筆ヲ見るよれた衣  
ヤラントス共自由ニ不行ツよクうち後之とをま  
ともむりなきて行<sup>レ</sup>心又あり怒故ニ存をくどう  
怒<sup>レ</sup>り年くたをれ心とあり血乳とこあるよ  
り<sup>レ</sup>キニフ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>むね<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>あき<sup>レ</sup>ものはたの

寛文  
三百九十四  
戊申正月九日

固齒明目散用標

一固齒明目散

能ト丈山<sup>レ</sup>傳受<sup>レ</sup>クもサホドノ義ともおもひそ

馬<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>漸<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>比<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>至<sup>レ</sup>齒ノいたむ時ツツのむよさ<sup>レ</sup>

ウツクニ付<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>事ト<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>好<sup>レ</sup>念<sup>レ</sup>自<sup>レ</sup>洗<sup>レ</sup>モツワ

多<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>備<sup>レ</sup>モヤ<sup>レ</sup>ワ<sup>レ</sup>ギ<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>塵<sup>レ</sup>隠<sup>レ</sup>テ<sup>レ</sup>キ<sup>レ</sup>痔<sup>レ</sup>

三百九十五

大小用心得

一為養生常ニ兩便カンガニトイ<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>この方大用

初<sup>レ</sup>一度<sup>レ</sup>キ<sup>レ</sup>ワ<sup>レ</sup>置<sup>レ</sup>食物<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>養生<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>

モ<sup>レ</sup>通<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>ス<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>差<sup>レ</sup>タ<sup>レ</sup>ル<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>ナ<sup>レ</sup>ケ<sup>レ</sup>共<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>ク<sup>レ</sup>モ<sup>レ</sup>ケ<sup>レ</sup>セ<sup>レ</sup>ク<sup>レ</sup>リ<sup>レ</sup>ナ<sup>レ</sup>ト<sup>レ</sup>テ

ト<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>久<sup>レ</sup>交<sup>レ</sup>存<sup>レ</sup>イ<sup>レ</sup>シ<sup>レ</sup>ヤ<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>味<sup>レ</sup>テ<sup>レ</sup>モ<sup>レ</sup>合<sup>レ</sup>点<sup>レ</sup>エ<sup>レ</sup>カ<sup>レ</sup>ズ<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>目<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>来<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>

獲<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>便<sup>レ</sup>通<sup>レ</sup>タ<sup>レ</sup>ル<sup>レ</sup>初<sup>レ</sup>ノ<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>危<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>他<sup>レ</sup>亦<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>ト<sup>レ</sup>カ<sup>レ</sup>タ<sup>レ</sup>リ

タ<sup>レ</sup>リ<sup>レ</sup>殊<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>持<sup>レ</sup>シ<sup>レ</sup>テ<sup>レ</sup>ヒ<sup>レ</sup>ト<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>通<sup>レ</sup>保<sup>レ</sup>養<sup>レ</sup>良<sup>レ</sup>テ<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>ヘ<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>也

思<sup>レ</sup>カ<sup>レ</sup>カ<sup>レ</sup>モ<sup>レ</sup>シ<sup>レ</sup>ブ<sup>レ</sup>ラ<sup>レ</sup>バ<sup>レ</sup>ヤ<sup>レ</sup>ク<sup>レ</sup>カ<sup>レ</sup>シ<sup>レ</sup>ガ<sup>レ</sup>エ<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>然<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>ノ<sup>レ</sup>病<sup>レ</sup>ノ<sup>レ</sup>由<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>タ<sup>レ</sup>リ

テ<sup>レ</sup>食<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>吞<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>ル<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>ク<sup>レ</sup>シ<sup>レ</sup>カ<sup>レ</sup>工<sup>レ</sup>刻<sup>レ</sup>積<sup>レ</sup>等<sup>レ</sup>フ<sup>レ</sup>タ<sup>レ</sup>心

懸<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>ベ<sup>レ</sup>キ<sup>レ</sup>ト<sup>レ</sup>也

三百九十六  
申正月廿八日  
○十心

信心 精進心 念心 慧心 定心

施心 戒心 護心 願心 迴向心

△任王護國般若波羅維多經菩薩

教化品

寬文八年戊  
聖殿集云富貴有苦

三百九十七  
二月二日聖殿集云

一古人云財多害身若高富神誠哉

樂天云富貴亦有苦々在心危愛貧

賤亦有樂々在身自由云云

三百九十八  
同書清貧濁富

一光明皇后御筆云清貧常樂濁富

恒憂ト云云

三百九十九  
同書俱生神

一人生時二神有左右肩居善惡記畫

夜論是俱生神之闇室欺

サレトイハル誠哉仁王經夜文字書成ハ

寛文八年  
戊申四月

見サレトモ文字有辟言タリ身ヲ思ハシ

誰慎カシ

同書不学内典外典劣糞土

一唯外典ガリ利益スリナシ外典ガリ

執惡道落タ事尤可存知内外俱不

學木石畜生等カレシ唐朝仁宗外典

不學子人呵詞云朕無學人觀禽

獸辟言スル鳥有鸞鳥鳳獸有麟草

木比スル草有康韭艾木有椿糞土

比スル土民養食糞土五穀漁サレ糞土ニ

劣ト云ハリ

四百一 同肩無多聞无智惠似人身牛

一多聞智惠アル人亦説是信スヘシ

眼アル人明中在如多聞モナク智

惠ナキハ人身似タル牛也

四百二 同肩随心住所

一古人云魚有慕潭性鳥有擇水情是凡有惠

者第六識分別妙觀察智凡九性アリ此故自魚  
潭欣鳥木エラジ身心安穩ナラシ事ヲ思ヘリ然暮潭  
心深妙ナラハ必ハ功德池ニ入リ擇木ニ高賢終七重

實樹遊寛文  
四百三

同書人上中下

一書又云知不言不可也不知而不言愚也實君父等非義  
事ハ忠臣孝子諫言知非義不言不可ナレシ書曰能言不  
行國師也能行而不能言國用也能言能行國實也三

品中不能言不能行國賊也同書  
四百四  
同書云

一書曰有智無行為國師無智有行為國用有智有行

無智無行者實國賊也知事ナリシテ徒衣食財實費

一大乘解行正宣揚解開修行德現人師國實タレハ

無義談話無益感日暮夜明先陰不惜善根不

修一生空過父母師君國王三寶恩山ヨリモ高海ヨリモ

深更不知孝順奉事報セシラ猶及ヘララス四百六  
同書云

同書忘主君父母之恩不異畜生

一父母師君恩報セサレハ不孝過ナリ是經阿鼻業説淺深  
輕重アレトモ盜戒ニアラスト云事ナレ信施受不報肉山  
成園尊成事アリ或皮ヲガレ或肉ヲ割テ下皆背受衣  
食報答也無知無戒若利心計後報不怖只畜類ニ異



信 同書 入佛道人

寛文 四百七 四百八 四百九

同書 天狗 鬼 大徳末 命 命 命

一 日本天狗云事 經論中見 不及真言中 天狗云云

一 日本天狗云釋 日本天狗山 威如 野行也 是鬼

類之 鬼ト云ト 傳タリ 書中モ 録マ

一 女人 是一切 惡道 源 ナリト云エリ 又云ク 諸苦 所因

一 負慾 爲本ト云ヘリ 又酒ハ 迷乱 起罪ノ 本ナリト云ヘリ 諸過

一 古人云リ 無智ニメ 智者ヲ 学ヘカラス 初心ニメ 切者

一 我身ノ 始ヲ 思ハ 白肉ノ 父母ノ 媼 赤肉ノ 母ノ 精氣

一 諸人 何事ヲ カナス 一期 ナスト ユロハ 皆衆苦ノ 業因

一 肉身ニ 在ナリ 前生ノ 佛縁ノ 淺深ニ ヨツテ 男セノ 命テ

一 佛縁ノ 深ハ 男ト 生レ 佛縁ノ 淺ハ 女ト 生ルニ ヨリ

一 遺去 未來ノ 果報ヲ シルベシ 千世 縁アツテ 夫妻ト ナリ 五

一 君臣 師弟ノ 縁ハ 親子 兄弟 夫妻 ヨリモ 深縁也

四百十三 申三月六日 法華社 同書坐禪工支

又云ク人坐禪公案工夫ヲナス事 晝三度 夜三度 勤ムヘシ  
譬言ハ敵ノ家ニ入テ起卧ヲスルカ如クニスベシ心ヲ許ス

四百十四 同書得法守

一古人ノ云ク法ヲ得テハ易ク法ヲ守ルト難シ

一諸佛ハ念ノ起ル源ヲ知ヌイテ惡蕪ヲ見玉ハズ是ヲ無

念無心ト云フ念ナケバ生死中ニ心ナケレバ種々ノ法オユルト

ナシ此心ノ際シルヲ見解トモ悟道トモ生死ヲ出離ス

トモ解脱トモ世尊トモ如來トモ成佛トモ云ナリ夢ノサ

カルホドハ有心有念トモ思ヘトモサメテ見タレバ皆盡ナリ佛ト

ヲモイ衆生トヲモイ悟トヲモイ迷トヲモイ有トヲモイ無トヲ

モイ其源ヲサトリ得バ又無念無心ト云ヘキモノモナシ其時

四百十五 同書諸佛心

一諸佛ハ念ノ起ル源ヲ知ヌイテ惡蕪ヲ見玉ハズ是ヲ無

念無心ト云フ念ナケバ生死中ニ心ナケレバ種々ノ法オユルト

ナシ此心ノ際シルヲ見解トモ悟道トモ生死ヲ出離ス

トモ解脱トモ世尊トモ如來トモ成佛トモ云ナリ夢ノサ

カルホドハ有心有念トモ思ヘトモサメテ見タレバ皆盡ナリ佛ト

ヲモイ衆生トヲモイ悟トヲモイ迷トヲモイ有トヲモイ無トヲ

モイ其源ヲサトリ得バ又無念無心ト云ヘキモノモナシ其時

四百十六 同書無言行 忍程

一云ク世が世也 後世おきりらんと思はんは道世がたや

四百十七 同書後世願様

一云ク世が世也 後世おきりらんと思はんは道世がたや

四百十八 同書無言行 忍程

一云ク世が世也 後世おきりらんと思はんは道世がたや

四百十九 同書無言行 忍程

一云ク世が世也 後世おきりらんと思はんは道世がたや

或時作ルル年來死ヲ好意樂

依理をどうのこあらうと云ふ

力ふては亦力寸うよ子根不なるにたまて不存ん

づらむと云ふものほぶをせきにだこそ成房のちの加に

一もよくとくしてとくんと志あり給をるおだ制しきて

多いまハなるもあま根なるにともつおハせ死の好意と

死をとも祿がふ意樂のむびる也後世のこハなきと云ふ

病小なるやこれ後世未の文學子也身ハけがふ心むを

いふとそいふかちれども多利ををちてのうのり也

我を逃去ある様ふうそふさあまはるはうをまをむて心

又云て地心の要小は(不獨任人おはくハむことふ志ある)

一敬道云日本後世の心あるもの之學向をトつれ終大旨ハ

一有云解脫上人食まの味之味之終

一解光上人云方法門死の一字ヲとく我が則死ヲ思はざきハ

一方法心自然心へ心之のふあ

一其ハ善根のをね目ふ仏道不寸む属能輪廻のきづな

一明遍云出家遁世本意ハ道のり(野べのり)死をむと

あふとし一念之人おうらむべうす其不付るは仏力あふく

四百三

同書佛道願様

同書不立用身大要

四百四

同書佛道願様

四百五

同書佛道願様

四百六

同書佛道願様

四百七

同書佛道願様

四百八

同書佛道願様

四百九

同書佛道願様

五百一

同書佛道願様

五百二

同書佛道願様

五百三

同書佛道願様

五百四

同書佛道願様

五百五

同書佛道願様

五百六

同書佛道願様

五百七

同書佛道願様

五百八

同書佛道願様

五百九

同書佛道願様

六百一

同書佛道願様

寛文八戊申年

貯易捨難

一或上人同法ヲ戒云ものなかりがし給るるタラシ倣ハやくて捨ツッ  
大らあるなり云々

一法純上人云一丈の城をうつむと思つらん八丈五天をかん  
四又云世世に使定と思ハ定ては依不定とおそつらん

四百廿二

天変

一寛文八戊申正月朔日庚子日二日朔日庚午同朔日

四日六日江戸大出あり也  
月正日廿六日此日二月三日五日六日  
小辰の月かこころ方しつり羊天追  
七月五日の月かこころ方しつり羊天追  
ト在る也

申正月廿七日二重七清未ニシテ用

けのちきりありん人しを慈想つと云ふなり  
出言多論我れと云ふも思ふらるるなり  
我れ者不なく忠孝慈の心を思ふなり  
お我れの欲めておこいやりすなり  
おけはうより云ふも可なり其心あり  
我れ行つ忠孝慈の心を思ふなり  
申正月廿七日二重七清未ニシテ用

忠之道養生

一日比養生生ニシテ似人ニスヤカニクハ忠ノ道ヲタテテ命ヲスレタ  
メナリ代ニホタスナニシテ父母アリテ来ハ生ヲ得タリ也  
ナガラエ有テ今更命ヲシバ鳥獸ノ類トヒトシ美我ウスキ故ニテ  
セリ何トテ死ヲシヌカレトモワシハ譬言曰我ヨリ若クイナリ若  
祖父ノ命ヲ継タラハ短カラズ本末一本ノ木也長キ也思フ  
一知恩而成無病

申正月廿七日

一知恩而成無病

寛文八年戊

四百五

一 唯戒及施不放逸今世後世為伴侶

因心趣知味

四百六

一 唯戒及施不放逸今世後世為伴侶

四百七

一 唯戒及施不放逸今世後世為伴侶

四百八

一 唯戒及施不放逸今世後世為伴侶

四百九

一 唯戒及施不放逸今世後世為伴侶

五百

一 唯戒及施不放逸今世後世為伴侶

五百一

一 唯戒及施不放逸今世後世為伴侶

五百二

一 唯戒及施不放逸今世後世為伴侶

五百三

一 唯戒及施不放逸今世後世為伴侶

五百四

一 唯戒及施不放逸今世後世為伴侶

五百五

一 唯戒及施不放逸今世後世為伴侶

神妙月三目圓靜誠

寛文八年

四百四十四

一知自惠出八角靜誠

四百四十五

一怒目惠出八角怒虛

不瞋可基本心

四百四十六

一怒目三三三命ヲトヤ然共慈悲ニテ奉公ニナラハ各別也

自然心乱ハ本氣ニアラズ

四百四十七

一惠心通吉從逆凶惟影卿首一朝之

奴心忘其身而及其親矣

四百四十八

一道理ノ真實

四百四十九

一十玄東水神

四百五十

一之遶

四百五十一

一長羽王度

四百五十二

一佛

四百五十三

一善薩

四百五十四

一縁覺

四百五十五

一聲聞

四百五十六

一今時ノ人ノ愚ラ云ニ我人ニ能ト方テ思ナラハフカリヤ

四百五十七

一今時ノ人ノ愚ラ云ニ我人ニ能ト方テ思ナラハフカリヤ

四百五十八

一今時ノ人ノ愚ラ云ニ我人ニ能ト方テ思ナラハフカリヤ

四百五十九

一今時ノ人ノ愚ラ云ニ我人ニ能ト方テ思ナラハフカリヤ

四百六十

一今時ノ人ノ愚ラ云ニ我人ニ能ト方テ思ナラハフカリヤ

四百六十一

一今時ノ人ノ愚ラ云ニ我人ニ能ト方テ思ナラハフカリヤ

四百六十二

一今時ノ人ノ愚ラ云ニ我人ニ能ト方テ思ナラハフカリヤ

四百六十三

一今時ノ人ノ愚ラ云ニ我人ニ能ト方テ思ナラハフカリヤ

四百六十四

一今時ノ人ノ愚ラ云ニ我人ニ能ト方テ思ナラハフカリヤ

四百六十五

一今時ノ人ノ愚ラ云ニ我人ニ能ト方テ思ナラハフカリヤ

寛文八年  
須臾ニハナルベカラズハナルベキハ道ニアラズ死ヲ思ヒトシ

申カニ  
四百五十三  
四時之帝及神

一春三月之帝太皞大皞氏木德之君

其神句芒少昊氏之子自重木官之臣

一夏三月之帝炎帝神農氏赤精之君

其神祝融顓頊氏之子名櫛少昊氏之臣

一中央之帝黄帝軒轅氏黃精之君

其神后土同初少昊氏之子名土官后土者走句龍

一穰三月之帝少皞金天氏白精之君

其神蓂莪文少昊氏之子該也

一冬三月之帝顓頊高陽氏黑精之君

其神玄冥同人之子曰脩曰熙相代為水官

蓋天地以五行成萬物有以尸之則生而

有以德於民者没而祀之以王時事亦

亦直乎

飲酒十過

論

申子月  
四百五十四  
飲酒十過  
智度  
下少  
眼視不明  
現噴惡心  
壞田業資生  
致疾病  
益關  
愚若流布  
智慧減少  
命終墮惡道

天地知善惡

人心生一念天地悉皆知善惡若无報  
乾坤必有私

明惠之恭時異見

一詞不可執ト云お平ニ北條春時、明惠と人

イケンノ曰

病の者先根原シレヤて葉ヲあへく重シ故  
其冷之類火ヲさしむ自病退き才種おける  
何ニ優すもそと先根原ヲ知陰一トす  
あてて今目のあ小差あるもの形もさるるお  
行ひ違ふ事計お沙汰一法を治人の事トす

一人を求有其身正則曲其政正國

け正ト云ふ心類ナリ又云君子其也言  
出以善行ナリ十里ノ外皆應心ト云ふは善ト云  
を歎也

△注曰世ヨリイノ人自報ホキ類ト云ハナレズ

諸國守護

太守一人実小を歎ふ太守ナリ法に其法不  
ち其其用不恥て玉求の力也自れ小歎心ナ  
多し小歎知是示ある天下治まる



寛文八  
申

一明惠聖人御誨抄人かまづやうと云七文字

四百五十九

是レ背故一切画し

一桑田楊澤頼朝公被下遊と定細中書宗と云ふ所の二たの

申不出時と云ふ自知るて宗と云ふ所の二たの

新条あてまらふ時心の剛くぬぬ教へよと云ふれ

た出射り起るよ心の剛くぬぬ思つ腹痛

おつといひたれだ胸のぬぬ思つ腹痛

後之恩ひはぐとれだ心下平や字あて

あながくあましとれだ用心成れせと

いふ心やれとれだおもたすお恩た

しとお幸ふおあしとれだ命を細くこと成

のりたるふふあて守へ平命を細くこと成

小矢らんふ八人多ぬあんあんいゆる本塔の

れこのまれふ八多ぬあんあんいゆる本塔の

源平乱御七源平乱御七討死方

三 持我依依御用と云ふ 夜田小三常 河原右左

四 日 浮平乱御七源平乱御七討死方

五 持我依依御用と云ふ 夜田小三常 河原右左

六 日 浮平乱御七源平乱御七討死方

七 持我依依御用と云ふ 夜田小三常 河原右左

八 日 浮平乱御七源平乱御七討死方

得ず故大将のふいゆにりて抑<sup>し</sup>未<sup>レ</sup>中のをれ<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>  
あるいしく將を好て人の強<sup>ク</sup>智を強<sup>ク</sup>守<sup>レ</sup>世の<sup>レ</sup>難<sup>ク</sup>  
たもかつこ<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>法<sup>ハ</sup>ばま<sup>レ</sup>づて<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ある<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>ませ  
後<sup>ハ</sup>寸<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ハ</sup>又<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>ぬ<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>皆<sup>ハ</sup>ゆ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>六月<sup>ハ</sup>の<sup>レ</sup>度<sup>ハ</sup>お  
こ<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>体<sup>ハ</sup>ゆ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>計<sup>ハ</sup>ゆ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>終<sup>ハ</sup>ぬ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>ゆ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>て  
そ<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>月<sup>ハ</sup>を<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>代<sup>ハ</sup>ゆ<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>か  
新<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>位<sup>ハ</sup>を<sup>レ</sup>授<sup>テ</sup>て<sup>レ</sup>帝<sup>ハ</sup>ゆ<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>了<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>世<sup>ハ</sup>國<sup>ハ</sup>土<sup>ハ</sup>の<sup>レ</sup>國<sup>ハ</sup>とい  
あ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>強<sup>ク</sup>つ<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>相<sup>ハ</sup>直<sup>ク</sup>さ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>給<sup>ハ</sup>ゆ<sup>レ</sup>此<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>の<sup>レ</sup>位<sup>ハ</sup>を<sup>レ</sup>  
ま<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ゆ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>ゆ<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ゆ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>  
と<sup>レ</sup>え<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>度<sup>ハ</sup>う<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>  
く<sup>レ</sup>思<sup>ハ</sup>る<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>ゆ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>かり<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>元<sup>ハ</sup>り<sup>レ</sup>

此<sup>ハ</sup>爲<sup>レ</sup>君<sup>ハ</sup>爲<sup>レ</sup>世<sup>ハ</sup>よ<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>事<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>思<sup>ハ</sup>ふ<sup>レ</sup>言<sup>ハ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>

あ<sup>レ</sup>金<sup>ハ</sup>財<sup>ハ</sup>糸<sup>ハ</sup>う<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>途<sup>ハ</sup>い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ゆ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>と<sup>レ</sup>明<sup>ハ</sup>王<sup>ハ</sup>  
定<sup>テ</sup>と<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>好<sup>ク</sup>い<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>者<sup>ハ</sup>又<sup>ハ</sup>老<sup>ク</sup>又<sup>ハ</sup>七<sup>ハ</sup>反<sup>ハ</sup>の<sup>レ</sup>ゆ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>又<sup>ハ</sup>金<sup>ハ</sup>を<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>ハ  
何<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>好<sup>ク</sup>べ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>君<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>尊<sup>ハ</sup>紀<sup>ハ</sup>金<sup>ハ</sup>財<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>  
た<sup>レ</sup>人<sup>ハ</sup>ち<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>國<sup>ハ</sup>土<sup>ハ</sup>財<sup>ハ</sup>志<sup>ハ</sup>ゆ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>米<sup>ハ</sup>穀<sup>ハ</sup>財<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>所<sup>レ</sup>  
民<sup>ハ</sup>を<sup>レ</sup>豊<sup>ク</sup>又<sup>ハ</sup>成<sup>ク</sup>く<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>ゆ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>好<sup>ク</sup>そ<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ゆ<sup>レ</sup>  
慈<sup>ハ</sup>悲<sup>ハ</sup>又<sup>ハ</sup>て<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>我<sup>ハ</sup>ゆ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>答<sup>ハ</sup>を<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>  
と<sup>レ</sup>好<sup>ク</sup>へ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ず<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>國<sup>ハ</sup>土<sup>ハ</sup>財<sup>ハ</sup>流<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>  
之<sup>ハ</sup>病<sup>ハ</sup>財<sup>ハ</sup>とい<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>某<sup>ハ</sup>財<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>く<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>此<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>

悲歎きく事シキタメは只代とわらむ志願の人宗跡ハ成基也ホニテ  
もつて也シキタメの成法作ル水自をとアんとてやう家  
中させて字ハ深シキタメまいり寸意とて一うかへ多腹之  
なれく念してけしむるありやいとを堪てやをた病  
にゆるりし水筒は代ハ何れも目かしく我知を代  
中ゆんたふるさる毒ハまをるひあす我知を代  
知るは下さるる依止シキタメあふる一うんハ心ホカ  
ちて徳性シキタメも是ハ心然とまりふくハ心ホカ  
らぶ思ふも思ハ我知を代とせとせ地法すシキタメ徳  
申シキタメ只ける身一の寂然とせとせ地法すシキタメ徳  
一慈徳ノうま慈眼大師シキタメ慈鎮シキタメ詠哥シキタメ大樂流ハ教シキタメハ  
人とかくせしむる身のうれしうとせとせ地法すシキタメ徳

四百六十六  
勸議心シキタメ心シキタメ勸議心シキタメ心シキタメ

天生一人のゆきもくもく仁ヲ定ニはこ内を  
のづらもくもく仁ヲ定ニはこ内を  
止観云シキタメ止観云シキタメ

一止観云シキタメ天帝シキタメ礼シキタメ畜シキタメ師シキタメ豈シキタメ以シキタメ袋シキタメ臭シキタメ其シキタメ金シキタメ

家語第二云シキタメ楚シキタメ王シキタメ出シキタメ遊シキタメ之シキタメ鳥シキタメ鳴シキタメ之シキタメ乃シキタメ左シキタメ右シキタメ  
請シキタメ求シキタメ之シキタメ王シキタメ曰シキタメ楚シキタメ王シキタメ夫シキタメ人シキタメ得シキタメ之シキタメ又シキタメ何シキタメ求シキタメ之シキタメ孔子  
聞シキタメ之シキタメ曰シキタメ惜シキタメ乎シキタメ其シキタメ不シキタメ失シキタメ也シキタメ不シキタメ白シキタメ入シキタメ遺シキタメ之シキタメ而シキタメ己シキタメ  
何必シキタメ楚シキタメ也シキタメ何シキタメ必シキタメ楚シキタメ也シキタメ

四百六十六  
小學シキタメ書シキタメ註シキタメ曰シキタメ叔シキタメ敖シキタメ楚シキタメ官シキタメ名シキタメ為シキタメ氏シキタメ名シキタメ艾シキタメ為シキタメ兒シキタメ時シキタメ出シキタメ遊シキタメ  
見シキタメ兩シキタメ頭シキタメ蛇シキタメ殺シキタメ而シキタメ埋シキタメ之シキタメ故シキタメ而シキタメ返シキタメ母シキタメ問シキタメ其シキタメ故シキタメ對シキタメ曰シキタメ聞シキタメ惜シキタメ見シキタメ兩シキタメ頭シキタメ

寬之八年

四百六十七  
戊申十月三日

蛇者死鄉者見之恐去母而死也母曰蛇人今安在  
曰恐他人又見殺而埋之矣母曰吾聞有後德者  
天報以福汝不亦死也及長為楚相

自敬言 朱子自敬言

朱子

三傳市祀人猶信

是者朱子之詩無之或定唐人手為書有詩此語各  
朱子之作云為由弘文院學士延至七已未仲夏納為語也

韓非子曰龐共謂魏王曰三人言市有虎王信乎曰寡  
人信之矣龐共失市無虎明矣而三人言成顧王察

採衣婦人亦殺列女傳曰尹伯奇母取蚌女毒

繫衣上伯奇前欲食之母大呼曰伯奇幸矣秋父吉甫  
見疑伯奇自死

世正印名者木雁

座中

果苑曰吳孫權時永康有久入山遇一大蛇

柳子厚送薛存義序

柳子厚

四百六十八

百六十八

送薛存義序

凡吏于土者若知其職乎蓋民之役非以役

民而已也凡民之殺食於土者出其土彌乎

吏使司平於我也今受其直怠其事者

天下皆然豈惟怠之又從而盜之向使傭

一夫於家受若真怠若事又盜若貸其器則必

是也怒而黜四罰之矣

寬文八年

四百六十九  
戊申十月十日

# 西方大聖人

大宰嚭問孔子曰天子聖人歟對曰仁博識

強記非聖人也又問三王聖人歟對曰三王善用

智勇聖非仁所知又問五帝聖人歟對曰五帝善

用仁信聖非仁所知又問三皇聖人歟對曰三皇善

用時聖非仁所知大宰大駭曰然則孰為聖人

乎夫子動容有問曰仁聞西方有大聖人者焉不

治而不亂不言而自信不化而自行湯湯乎

人無能者焉

灌頂經文

四百七十一

灌頂經云閻浮提內有辰旦國我遺三聖有化導

四百七十二

清淨法行經文

清淨法行經云用光菩薩彼稱頌曰光淨菩薩

四百七十三

彼稱仲尼也葉落菩薩彼稱老子云

四百七十四

老子曾姓經云我師化遊天竺善人泥洹

四百七十五

半觀六云引儒童經云禮義前開大小乘經然後

四百七十六

可信辰旦既然十方亦尔也

四百五十五

一弘文云佛教流化實具賴於茲禮樂前馳真

道後啓

孟子言 子孟子 公孫丑上篇

孟子曰子路人告之以有過則喜

禹聞善言則拜

木燦有失焉善與人同舍己從人樂取於人以為美

四百五十六

一子曰性相近也習相遠也

四百五十七

一易曰氣象未分謂之大易元氣始萌謂之大

壯壯嚴論偈

四百五十八

無二病第一利知足第一富善友第一親

涅槃第一樂 見大藏一覽

戊申十月七日

寬文八年

師曰吾嘗終日不食終夜不寢以思無益不如學也

見圓覺見疏

八論卷

四百八十一

頓教因地揔有三重初者悟覺性二後致其菩提心

後修其菩薩行

常平倉

四百八十一

惠民之法其吳善於常平司馬溫公曰此三代聖人

之法非李惺耿壽昌所能為也陳止齋曰周禮以

年之上下出歛法蓋年下則出恐穀貴傷民也

一本心指日月利欲貪食之盡

維摩經

四百八十三

心淨歡喜起近取見聖不憎惡人起調伏心

對惡人三念

梵網經古蹟

四百八十四

一念被人心性本淨醉天明酒着煩惱思不獲

已有此所作耳

二念本願我為衆生折言證菩提生死大苦尚不

在況此小苦應忍不忍受

慈悲

三念彼思由ハシ福宮ニ乃成ニ忍行彼即成ニ滿我菩提ニ

寬文年  
四甲申  
五

因何乃北ニ息反ニ生ニ顯言ニ

四百八十六

一五礼 吉凶 軍 賓 喜  
老子大道智惠

四百八十七

一老子云大道ニ寂有ニ仁義ニ我知ニ息山有ニ大傷ニ

元遺山詩無端ニ斷ニ金破ニ乾坤ニ杪ニ禱始ニ義ニ幾ニ皇ニ一ニ  
畫時

八風

四百八十八

同古堂傳  
訓 喪 毀 譽 編 譏 苦 樂

一討果ニ不云ニ共心ニ不有ニ忍ニ古堂之教ニ當觀ニ十忍ニ須ニ

心即滅ニ若為ニ慈ニ非ニ悲ニ現ニ念ニ怒ニ相ニ善ニ善ニ薩ニ利ニ生ニ方便ニ却ニ  
覺ニ提ニ心ニ慈ニ悲ニ味ニ全ニ之ニ所致ニ也ニ只ニ應ニ往ニ慈ニ心ニ觀ニ

十忍

四百九十

同古堂傳

音聲忍 順忍 無生忍 如幻忍 如燭忍

四百九十一

如夢忍

如響音忍

如影忍

如化忍

如空忍

一或二隨ニ北車ニ天ニ預ニ得ニ天ニ辟ニ敵ニ只ニ無ニ欲ニ

無我ニ二ニ勤ニ他ニ也ニ古堂之教ニ孟子曰ニ愛人ニ不ニ  
親反ニ其ニ仁ニ治ニ人ニ不ニ治ニ反ニ其ニ智ニ禮ニ人ニ不ニ答ニ反ニ其ニ敬ニ



寬文六年

四百九十二  
戊申十月九日

又曰仁者無敵此段最好竟察猶有菩薩四攝  
法更且觀焉

菩薩四攝法  
一愛語攝 二利行攝 三同事攝 四同羣攝

四百九十三  
同北五日

一寬文戊申九月七日己未刻九世戸文殊於寶前觀音識

拜殿御圍子古堂以取以也于同字目し書札  
相添來

五十六 生涯喜復憂未老先白頭  
勞心千百度方遇貴人勿留吉

右一通ニ以テ退リクハ人欲心ヲシテ道心

ニカキテ中ノ子血子ノ詔書寫ル哉し是  
心得下中汝面白キコト古堂ノ書中ニ有而

故天將降大任於是人也必先苦其心志勞其筋骨  
餓其體膚空乏其身行拂亂其所爲

所以動心忍性曾益其所不能

物心乃大道之心發化得一旦災報ニ逢下古又佛儒  
共ニ在之義從トニ以テ古堂多ク越シ八難

佛法八難 地獄 餓鬼 畜生 佛前佛後

北列 如龍身 如目 世智 辨聰 長壽





寛文申十月十九日  
四百五十六

又止是事何事も心たるといふは  
二つ三つあるを修と云ふは  
なくとも思ふ日本の道は  
云一字すす三止と云ふは  
思ふは止るは止るは止るは

同人止是

心も止るは心たるといふは  
心も止るは心たるといふは  
心も止るは心たるといふは  
心も止るは心たるといふは  
心も止るは心たるといふは  
心も止るは心たるといふは  
心も止るは心たるといふは  
心も止るは心たるといふは

四百五十七

又止是事何事も心たるといふは  
二つ三つあるを修と云ふは  
なくとも思ふ日本の道は  
云一字すす三止と云ふは  
思ふは止るは止るは止るは

同人止是

心も止るは心たるといふは  
心も止るは心たるといふは  
心も止るは心たるといふは  
心も止るは心たるといふは  
心も止るは心たるといふは  
心も止るは心たるといふは  
心も止るは心たるといふは  
心も止るは心たるといふは

人畜七初とて己入るる所ヲ見れば或は桃  
花或は月の舟行おて己しる様如くして惡  
くそと入一也心する人志す一佛志す  
と通るるに居る位起と云々河に不干要る言  
る短才身もたれし心けりて志すを  
申す也

四拍九

一從古堂申九月十日文三人不創不寒

外ヲ袖がぬれ袖芽てこころ心女事一六  
由と通人説くよく如く何とせしうれ  
多し佛法ぬと云々更孔子は

孔子孟子心少くも殺りて殺有佛道  
多及し之り也一物んりし令銀多極  
子とをなと誅しり何し書に

同嫌世智地位

一同書内文曰智也云々

佛法ニ小乘之修行ニ在之し大根ノ菩薩  
衆ニ灰心感智修行大ニきらいし又佛三  
不能上ニ不能轉定業不能度無縁  
不能盡血衆生界ノ佛法ニ人ノ子ナリ  
十ラニイテ思ハ思知ニテし血衆生界盡  
ヲヨキト存ズルハ欲セ我ノ地位ニイテ又

四百九十九

一

佛法ニ小乘之修行ニ在之し大根ノ菩薩

衆ニ灰心感智修行大ニきらいし又佛三

不能上ニ不能轉定業不能度無縁

不能盡血衆生界ノ佛法ニ人ノ子ナリ

十ラニイテ思ハ思知ニテし血衆生界盡

ヲヨキト存ズルハ欲セ我ノ地位ニイテ又

多合點不系以又世智以佛法人難ニテ  
心字者キミらハ世智ノ  
一乃其トモカク仙道ニモ欲ク我ノ  
ニナリ人ヲスクシトシ思ハ有

寛文八年戊申

五百一 阿在

一 申六月七日古堂文三員人此前ハ知時

前夜ハ力と出レク一美事纏齋前  
一乃其トモカク仙道ニモ欲ク我ノ  
ニナリ人ヲスクシトシ思ハ有

子其通也 同衆生淨度

五百二

一 同書維摩經ノ事付多たて人の員聖

ちウづまハケ所靈修行功積リ衆生淨度

事ニ修行トセ出家沙門セテ  
社極人ハ何處行モ云々  
修行ノ一乃其トモカク仙道ニモ欲ク我ノ  
ニナリ人ヲスクシトシ思ハ有

五百三

一 同書抜去淨自念珠終ニ取持

夫之由來也 夫山之文自天降善惡

五百四

一 自分惡行故ニ及テ難逢家

可及地ヲ召クイケシ美度トナリ其  
如去天山ヨリ申三月八日文ノ向



寛文八年

五百五

如し是のう天徳の道に於て其角の家及  
一從古堂申七月七日善書社之内分論人の

心ををよるれかよる人何れか  
心底の諸人毛教へ給せり及事よるも此心  
とや着てはあしき事一と云ふは  
たれちし思人毛諸るに五と云ふは  
大に一しき事よるは取子及し一  
一 行の字額同行律有は取子及し一

五百六

五百六

一行の字額同行律有は取子及し一  
是の道に於て其角の家及

修行の人は其が徳をよるれかよる人何れか  
所得得阿耨菩提上七マラ心さ一徳  
是の道に於て其角の家及

五百七

五百七

見付行是三三行中  
命数占し事悪律儀を嫌し事  
命数占し事悪律儀を嫌し事  
命数占し事悪律儀を嫌し事



心然之頼三枕ニ思シクハたけく斗ニ教  
トホ如く申シ定業亦能轉トモ心之能如  
クハ菩薩ノ云々此ノテ何復命數  
西ニ及ルルモ能如クシテ心と要友おと  
あーつるべし宋朝儒者人命數ト白  
者出合ト時亦今數ニ惠迪吉ト從進  
凶此外ハモクトト台セ申シトモ物  
是ニ者出合點トモ如シ

有日者謂黃直卿云善ノ算日星數知  
人福福直卿曰吾亦有箇大算  
之百福作ニ

言情而出者亦情而入其情而入  
者亦情而出此箇數一旦古今不差  
山豈不優於子之算數乎 鶴林玉露

寛文八年  
五百八十七  
戊申十月廿八日

一古堂同文内同治惠移兄弟善人と切く相合以終  
以分何よりモ修行ニ志シ西友ニ交リ以テ  
覺不同我身無思有友生悲ト善人と交モテモ道  
一。師老中同我身亦如ト云々

五百九  
同日

中ニ至極ク善道ニ入リ感入リ是モ又  
な事トシテ一切ノ事ト時ニ因縁ニ不  
成候トモ是モ忘ルルニあらず

寛文六年

五百九十九

一 同書後世同研心明審大事と思ふ心出来しと申す時

聖賢とて城とて所とて事とて聖賢の事とて

凡人の現世争と存と分る何と仕ふるも利

欲在聞心研離亦之は情心研明の如し

君子之便思人鈍其心遲其事と申し

人つづいてしるたれ心は如智愚の天性

多れする人そつ管し思人つ智者のつづ

くはる人こころの上の心つづ智をうつり

段あるものこころをこころとてこれとて

言へし孔子に仁道と三人の言はるは是

心とて人教つづいしを心とて心は

不教とて智者上思人ト八方事心は

言はるは六心とて逢事本とて

言はるは六心とて逢事本とて

言はるは六心とて逢事本とて

言はるは六心とて逢事本とて

言はるは六心とて逢事本とて

言はるは六心とて逢事本とて

言はるは六心とて逢事本とて

言はるは六心とて逢事本とて

五百十一

欲觀諸苦惱セバガッセル當觀知足知足之人雖卧地上猶為

大思教古堂之文釋加主釋迦大師曰

古堂之文釋加

古堂之文釋加

古堂之文釋加

古堂之文釋加



寛文八年  
五百八十八  
戊申十一月三日

道ヲ身ニシテ字ノ自ニテ元尺教子以歳之ヲ身  
中多事ニシテ内ニ定見（し）こそいふあふ氏の

代大近断者必敗其年

一其所之安樂成云人心靜而以落着

弟一之爲仕四直今朝大和方之爲奉

行老人被申也面白物語候何程

家作結構而衣類カサリ義食良自由而

爲暮人云共我不落着辟言其自身落

五百十九

一 刀垂し而三常、いつ方亦るを心ヲ付志

心ヲ油断あへくも事

一 女のかゝる性心薄

身へあふさきしりされた人の爲

免ぬしむたさす差をさしらす

古又不事時

心自由成し兼問凡夫仕置而找悪心

五百二十一

寛文八年

五百廿二

五百廿三

同

五百廿四

日

不出様ヨウニ智惠チ而心自由ココロノトヨク可引廻ヒキマゼ智チ

惠チ心ココロ至ニ昂ノボリ心ココロ即ツキ佛ブツ事コト

古堂コドウ教ケウ心ココロ能ス成ス神カミ佛ブツ祈イハヒ也ナリ

同傳ドウデン信シン解ゲ信シン若シ無ク解ゲ信シン是シテ無ク

一怒乱也イツニクランナリ至ニ邪ヤ氣キ可知シ愆チン心シン深シ也ナリ

五百廿五

同十日庭訓往下

聖德太子シヤウトクノミコ曰イハレ

一精進シヤウジン勤チン系ケイ濟ジ日ニ而シテ身ミ慎シ媿ケイ欲ヨク犯ハム正直シヤウジキ

解給

右ノ通ミチニテ人ヒト群グン集シタル時トキ佛ブツノ道ミチヲ

サツケ給タマフ由ヨリ甚シニ薩サツノ攝セツ法ホウ同ドウ事コトナリ

五百廿六

同日ツクニヒ勿ナラズ悔クハシ事コト

一王位オウイタリト雖モ早ハヤシモ悔クハシ給タマフ事コト有アルベカラ

不ズ去ク程ハ古コ詞ジニモ國クニ土ツチヲ治シ賢ケン王オウ八ハチ鯨クワ寡カ

ヲ勿ナラズ悔クハシ苦ク相サウ也ナリ也ナリ賤セニ者モノ上ノヲ

知チ又マタ也ナリ

右ミダリ下シタメ知チ者モノ或シテ獨ドク身ミ者モノ或シテ女メ射シ者モノ天テン油ユ

射シテテ年ネンヲ取トル見ミ兵ヘイ法ホウニ面オモテ白シキトナリ

五月十日庭訓往々不可緩急

寛文八年戊戌

一緩急息ハタエ元ニ事也。人心ニ油断ナク。慇懃ヲ  
宗トスベシ其心ヲユルシクハツレバ尾籠殊ニ多シ  
天ニ踏リ地ニ踏スト云フ本文有

諄

右能兵法タリ。禮義正シテ物事  
得。穩便而。靜謹。タラシ事  
禮法。其意

五百廿六

一綱ト云ハ樊噲ガ母ノ衣ナリ。女臆心アルモ野ニ  
沙ヲ持男心健ナレ共。白月ニ臆病ノ心アルガ  
故ニ樊噲會ガ合戰ニ出シ。母ウエノ衣ヲ

ナレト云心也其ヨリホ口下云事一出來外

右母諫面白子爲女性。武士母。其子

聞忠爲入身命。輕。我理。可出

勸糸母爲者。可成心得。哉書出候事

五百廿九

一養生休息外。斬日時徒光陰送。餘無  
下成。夏也。萬内弟。一思忠。勤心。間敷

五百卅

一見文字將猶視敵。文字法度三災警

一 猶見日九目自暗

一 猶持刀截泥

一 法出女姓生事久変多

一 三火大者火風水也

一 三災小者饑疫刀也

一 奸女文字四十五奴ヤツコ五奸カメコ

一 姪ウツカ妾カメコ妯イツカ妯カメコ

一 妯カメコ妯イツカ妯カメコ妯イツカ

一 妖カメコ妖イツカ妖カメコ妖イツカ

一 媪カメコ媪イツカ媪カメコ媪イツカ

一 媪カメコ媪イツカ媪カメコ媪イツカ

一 媪カメコ媪イツカ媪カメコ媪イツカ

一 媪カメコ媪イツカ媪カメコ媪イツカ

一 媪カメコ媪イツカ媪カメコ媪イツカ

一 媪カメコ媪イツカ媪カメコ媪イツカ

一 媪カメコ媪イツカ媪カメコ媪イツカ

一 媪カメコ媪イツカ媪カメコ媪イツカ

一 媪カメコ媪イツカ媪カメコ媪イツカ

一 媪カメコ媪イツカ媪カメコ媪イツカ

一 媪カメコ媪イツカ媪カメコ媪イツカ

一 媪カメコ媪イツカ媪カメコ媪イツカ

一 媪カメコ媪イツカ媪カメコ媪イツカ

一 媪カメコ媪イツカ媪カメコ媪イツカ

ヤラハ言来義ゴトクニ悪星ホ出テモ仕垂休代ハ云  
ふ榮ヲトハ乱ト云トモモ立位モ善モ惡モ方ハ公ハ凡ハ物

五百三十四

一 仲ノ由兼ト永竹ハ始ハ  
人ハニツツ人ニ家可有分別

叶ヲトワリニニチゲク時ニ我ヨリト下ニ尺ニ或ハ子シ定ダ  
ツルトイドモ釋事ヲ思ハチゲキモウスシト也ツレニヨ

五百三十五

一 右腹イタムハ食ヲイハ未モ鬱ウ  
リ東州ノ物語ヲコニエイチクコト出也也  
右腹イタムハ食ヲイハ未モ鬱ウ

一 無欲而止足覺不可レ逢ニ災難然ハ不レ獲ト

定業事

ニ欲ト思ル智恵ハ高ナク不知ル其ハ量故止ルコト不得心

ハ雖足ト其人ニ盈ル心ニ救可遭災難モ不弁

シバラモンバルハ已レ而難知義也去仍可願明徳智恵也

依茲智恵ノ目ニ能道見付行ノ足ニ至ル是ハ

常理已ガクケ程可届也可知ルサハ冬ニシル公復ノ

ワガヲモ忘ルハガゴトキ也

為可攻已可望長命

一 回ハ如愚心ガ右ハ孔子ノ曰ト凡夫ハ一入其通ニ可存

五百三十七

寛文八年申年カ



寛文  
五百廿八

戊申六月廿三日

ト人人也

怒人不可恕我

一。我公角也行テ人ハ角ハユカヌハミツハ行ホトス

キカ恵曲付タル者シ角トヤラントスレバ痛逆故

仁者柔而和方便別而ハ心淨歡喜大起近知恵ノ

分別可願也是ニ可叶ル方友哉今朝ノ心行

也

五百廿九

申十二月十八日朝

氷結之住居啓書

一。我ハ氷ノ上ニ居タルがめし時シ送トケ行テ江海ノ落テ

一命シスツニ一度ハ可果命ナレドモ身シツヨるニツカラ

カ充満ノアタニシバ彼氷早トケテ死ス板又ツノ

ツカラニメシレバ氷トケガレ民寒テ死ス去ヨリテ持

満ハ中道ヲ行ハ生付ソハホウヲモウケテ寿命ヲ

延一生ノ内ニ安樂ニ生不滅ノ理ニ終ベシ  
惡心ニ合有テモ天地ノ通ジ分トシテ榮耀ニ逢遭  
命モ短カルベシ或惡シテサバ深キ海ノ底ニ入サレ  
サレテ苦患ニ可合也

五百四十  
寛文八年十二月廿七日 懐本樂終

一 幼かりし月ノ末ルツ候様ニ老クモ其懐ルリ  
如方教テ云面白ト思フ也ツリツリ心計ありテ本ヲ  
忘レ主君ノ所奉命ヲモ不奉命父母ノ命ツルモ  
思上不出ワカ行先ツルル人并モ十人分陰ヲこころズシ

一ノツメナキフトニ日ヲ送行付シ候ハナシヤトモ不

知上ノ細指ヲ返レニモ美行越テ泣クカキリ諸人  
トモミキルヲ候又コノ先ノ安樂ナルヤトモ思行爲  
ニハ一息ノ内ニモ入時ヲ思一刻一日一月二年十

年ト女トモキリニ其加シヨリ合唱モ候極ニ正

五百四十一  
同日 月ツ候ハ尤メラシ細カヨリ此心何クモ覚候也  
一 殿様サハシハニハ漸ニ三万石程ノ所方代ノ

時モシカク由ニ有我ニ丸先祖ノ傳代ニテツ存  
公ノ上タル方代是業し御もあハラシメ家ニテ今ハ

三千石ホドノ力代ニテリタリ古ク思ハ大ニ殿様  
ヲ力代十分一ホドノ徳ニ終ヒテ付テツ家ニ使山ニ  
アルテシギ力上ノ身代上為ニラ信代ガテノリヤ  
惣信ノ何カトヤシタスモアラシク信代メラ  
ハ他アリ教ヒヨク有ル者ニ殿様ニ不仕人ニハバ  
あり方々居テシテ一ヨクハ我ホナトハ合ニあふ汁モ此  
トウ歩行ニハ石キト云トモウ恨一歩ノトモ知ル  
手扱ニテ天下ノ人ニハ此ハ成ニト私コトキノ輩  
とハ根深ク思ハシ蒙リ代ノ命ヲツツキキト  
ナカランカハ上ノ命ナカシニテ命子ノ命ルカハ  
思又ハバ力代ノ上ニ合モナリ欲ニ終シテモハシモハシヤ  
子テモ之テモウ代永クツツキキル教ヒテ思  
且又ツモ公ノ為ニテラズニ身ヲスルテモ不可由又余  
人思ニ我ニ合ニ忠ニ心至ハ各別メラフ也

五百四十二  
寛文九年三月四日

改己身習

智惠ナリテ誠ヲ不知故ニヤ泣ク有友家ノ火災知行  
大早損一度彦以力代ツツキカ子アノ子リ我ニ随キ  
輩ニシテ物ノ自由モ余不家ノ借度モ衣類ノ儀モ  
セテ金銀モ方々ナリノ心入サ(テラテテ)一智

惠不明ウスキニヨリテ人シテクヅウナクナツキ侍極  
ニセテトトノイテム其者トモ身ニモ心ニモ覚有  
ルレト云凡云ヤトハ思ハ板又ハ川也輩ハ  
我ラヨリハイトノイテムシ可ヤノトト上ノ平直ニ仕  
可ヤノシ我カキギニイテムラノトハ不叶ハ夫  
足リ可ヤ任モノシメグム役者シバ主人トモ親類  
又ハ以共地取ル云ニモチモドモノ天ヨリサツカ金  
米シサヘシカスメレテワガ法分ト思ハアリツメナキ  
ヲナレ凡智惠ウスケシハ其誠シ不知ル習テト思  
目ノモノナラント思故イカニ可有ヤ我カ縁者ハ分論  
他人一モ我シシカル者ハ千ナニモスルト思ハ何モナク  
ヤハ教習度事ニ

願有款味

五百四十三  
寛文九年三月三日

一 心志やわかく、魚は、さるも、おぼあるひ、  
大身ニナラン或金銀ホシト人ハ思トニテホシカルニ  
テハナシ子細ハ大身ニナラント云金銀手おハヨルヤウニ  
ト云モゴヒシホドコシ救ンガナルニワガ為アメ款トモヒ  
ナシゴリシキハ又侍者ニヨキウサセハ身シ不思ハ  
我為ホシガリニテハナシ又スニント死ハトモナシ秘

ツギニ諸ツ付我ト身へ付付ルがめし然る惠心ヨリシ  
コリ室ヲハハハ似父ル損ニテ室サカワテ入モノハ又十  
カツテ出ル求タルニテラズ右由ニテハ商分求モカメシ  
世ツスツス我身ズツルハ捨又人ヲゾスツルトハ見ル  
物大分ニ持タルモノツ我身ニ相應ル居家衣類  
食物器物ツレクニ捨テ外アラバ人ニ施ベキ事也  
世ト不お恵ニテ歎カヌルハ我煩ニハナルニジテ共ツ  
トテモツイ(ニナリテスリキラバも病氣也救世ノ  
ニナシモ不念ぬれはくはあまや救世ノモトナリ

侍ノ社家出家ニテラレタル人サハ社家係ルハ神佛ノ

ニテ社家出家ハ神佛ノ守ツ仕テ内ツカノ斗  
扶助シタルヲ皆ワカシメ救モツ昆ニツカフ故画ノ  
ナシ人ノメグミ堂塔ノ修理一モ不入邪ニモナシ其上  
ニモ不足ト云テ欲ノ上ニ慾ツテモツナキ事トイハ  
レタルを歎ス侍ノ知行ヨリシサムルモ同事ノ終  
心ツ付私ツ忘レ金銀ヲモ施ベキ哉天ノツホヤ  
ナシニヨリテ急ニ是非モ不來ニ付由リシ欲ニテ  
知直心モナリウレ行乞モ三(又トシモハシ)事

寛文十二年十一月十三日

五百  
寛文八  
戊

申  
正月  
十三日

可  
悪  
家  
来  
与  
百  
施

施業院上ニ高地ノ渡り下其ニテ非人ノ施るウニ  
社仏寺仏堂心神佛ノ救領ナルニ宮守出家等  
私ニテシゲルアリぬモ武士モ或百石モ俵以下ハ  
殿ノ小身奴モアルハ生ヒ口ル人ノスメリナク其ノミ  
ゾミアラシトノミ然リ我一人ノルメグミヤウニお  
人トヘ一施ウスクハ信施ヲ罪モシソロシ刹百姓ヨリ  
多クテテシサメサセバ盗人ノ実義ニト思バ地取ノ  
内ニツト奴氏ト人ノ十ノ内ニツトモ取テ外公家来百  
姓ノナリト是我ハ又ケム役人ト可心ハニサハナクメウガ  
社願寺仏社人ノ家来ナシトニニスルガメシ夫ノ責ニ可合

五百  
寛文  
三十一

及ノ道シ可立コト也  
居家必用ト云書シメツ又ハ見不見出家居ハナリ  
心得深クミ善ナレ行アメルコト多カラシキ一ノ勤  
本シ能クヤガキキキキキキキキキキキキキキキキキ

事ニモ地震ニモ用心ニモ又造トモトコホラ又  
ホトノ分量ナク商世シニハバシモテ向某アテイシ  
合款ハバガ分ア公ノ勤カホトノ合急人ノ是相又  
行狀家ニ乱ニモナルラント我ト仕至シコト病氣出  
コ又ヤウニ夏風入テハシクト可造冬ハ家廣リ天井

高キハ寒トモ火ノカカリニウスニ主関ノ近所ニ大在ノ  
穴寝アリ垢アリ江造タルモリリケル下モ分メトモ去アラ  
ハ又人スクナク大番シ格勅男女カ入モ不却ルヤウノ  
所小家ハナクニホニ合ムモ不自由ニ大ニリクニシリ  
月家ニテヒロクモセニクモ自由ニナスヘシ柳。水作逃家  
火作逃家。地震作逃家。前款用有家。身代家。当世  
家。男女家。我作法家。下作法家。右段ノ造ヤウ有ク  
△水作逃家ハ水ガルニ舟ヲ用意仕或地形ヨリ或床ヨリ  
或築山或堀空或スノ或無テ心得カモ工ノ上ニ子ダリ  
ハリ或板ヲウカメ火タキ所ノ交度板急水波来ニ板安工  
ムツキテハ舟ノ如クウカブヨリ早板ヨリナスヘシ除満ムニ

△火難逃家ハ家スクナク或土藪或又リノ屋是也

一入種ハアリ。武備志ニモ見エタリ。或尾ブキ  
或平尾或芝屋或カキカラブキ或石屋或  
江戸ニテハ冬ヨリ春ニ至イヌイノ風烈故北  
西ノ窓ヲトチトリワケハゴミタチ火飛モ知  
レズ防カンモ目見ヘズ息モツカシスニテ十方  
ノ失間銅ノ戸ヒララシ或ハ北西ニ別而ヨシカキ  
柴カキ等有ベラス或ニ重ヤ子ノ間ヲフサ  
ギ或立尾ニテ家ヲ包軒ヲ裏表ヨリヌリ  
或尾ノ間ヲノシツクイニテヌリ或家ヒキク

或梁間ヲセシク或家人廻馬上ニテモ自由  
ニ通能家人内外共ニ陰ノ人行當ルヨウナ  
スニイナク或シキリノ戸ヲサレソイテ障子ニテ  
モタツレバ陰ヲモ自由ニモラテ或方入達  
棚又ハ戸棚ナド過テスベカラスサレバ道具  
モ乱ニ飾不置カサレハ道具モツイエラ不持  
然レバ働吉或火燒所ノ風アテス鼠穴不明  
縁ノ下エ火ニワラガレヨウニ近邊ニチリ  
ククキワタ等シカズキワタニ火付ハゴクフニ

桶ヒシヤ水トビク等自由ニ水城ハルガ水城ハルガ

テ置家燒失レハ手桶モナク先故文庫ニ火移  
タル時ケサニカ為也火スハライ文庫ノキワエ  
シガクワホウキ等モ有之カ能ト云人亦也△地  
震難逃家ハ家下ツリニ可造或ニ階三階  
ヲ可嫌或柱フトク或家ヒキク梁間セラ可  
造ヤヤウニシバ上道具スリ十七迫ニヒサシ有カ能  
同ハ屋根付フロシガ吉或梁柱工打掛五寸程ヒサシ  
ノ方エ出ル可仕或梁ノ下ニ子木ヲ入可打或弁



ゴリ度能シ木枯レタル時分カエニ針可打或  
縁ノ下ニモツカトシラエ貫ラ可通或掘立土基造十  
トモ能トイヘトモスルテ震ハ石居ヨリワルキ共云石居  
ニシラロノホゾノ穴有モヨシ或梁ホツカ柱等ニ  
カカイヲ掛或ツリカナモノ卷カナモノ可有カ  
ヲ元トトカケ先モカナ切レ先時ノ為ニヨシ緒十ワ  
ハ葺巢ニヒクトイエリ或危又リ屋石屋芝屋ヲモ  
モノ有フ嫌フ鴨居ズレガヤウニヨリコニ所ニヨリ  
カナモノ可打或長押打或小カベ等モ不落様ニ貫ラ  
能エリ人ノ計ヲ新ラニモ上モ下モヤウニヨリコニ所ニヨリ  
四分一抄名モ昔或スチカエラモ所ニ減カカベノ  
或出ルニキリ戸コモ或段ノニエシラ仕出ニアイニナ  
無様ニスベシ或出筋ニ屋根ヨリ可落物ナク足モ  
ト以下ノ用心兼而アルベキ也△萬敵用心家スニ  
イ我ハ知テ人ニ不知レ戸ヲ明テ登屏凡シテ道具  
ヲ置ニモ可有心落シ穴モヒトニ得道具余所用  
ニ不気様ニ可置或我ハ出入自由勿論家來人  
馬舟等水練以下ニ至シモトヲラスベシ或敵不  
意ヲ入り鉄炮放シ木石ヲ二口ハ火ヲチケ熱湯  
糞土ヲ掛心此等ノ儀ニモ可叶或床高キハ工

一人下工土龍ノゴトク掘來リ。働ニ自由有リ。  
或核敷セナカ北セナカ月セナカニテモ手足ヲ土ニ自押ルニ針離  
然丸針入レ違チガイテ打也。或戸ヲハルニ鴨居  
フカク戸ヲハルズ中ノ穴一入深ク兩方ハス浅ク  
戸タケモ長キヲ抑コミワカウメ鴨居ハムハサ  
シ名時ハズレズ鴨居サシ下リテモ戸ハズサ  
バ明ルニ善。或カケガ子種ク有之用心ヲ元ニ  
スベシ。或刀ニテキルニ上ヘツカヘス。或天井ヒキウ  
シテ刀ツカエルヤウニスル所モ可有。或鑊前後

自由ニ或カケガ子種ク有之用心ヲ元ニ  
スベシ。或刀ニテキルニ上ヘツカヘス。或天井ヒキウ  
シテ刀ツカエルヤウニスル所モ可有。或鑊前後  
便ヲ失ヒ或敵大勢カ有テモ并ヒテ入進カスレ  
道ヲ仕或敵大勢カニテ已ト害ヲナシ又敵  
小勢ニテハ不得理様ニ心ヲ付ベシ。或味方  
大勢ニテハサナキヲニワスゴトクニ仰セ或サ  
ナクメ八方正面ノ人得モ可有。或明雪隠ホ  
モハ程ク有ク未ダ八軍書ニ見エタリ。或道  
具スニイテ心カシク常山ノ蛇ヲ可用。或  
初モナク終モナキヤウニ可心得。或諸病ニ  
災難ニ遭ク下無窮キウニリモなるを皆生示シルニ珍也。

△身代家相應のほどをわんご後、修復ニフリの分  
量も可有或や隣子のこころに付ても表裏有て  
きまひよせむ齊と思ふるをもよ隣子教も其  
ほどあらん或客来しをいざんすすよし家来  
数のほどと心得猪島の廣さ可有或は役のふよし  
より存友のおくきさ、并内證の廣さし可有或  
玄冥腰懸の外にまことまきめくほどの心得すきや  
△尚世家に我やと思とも付のちるすていにおろすや  
一寸べし或道具多くと書院床并床のたす

ありては、心よまう寸べきや △男女家の  
夫婦をて奥をけらるを先すまい女の心よ可随就  
どもことふ付不用心成る寸べし或あつとの  
心の武士の家習寸べし或男女おちし、産後た  
らば談合してす中よべし或火のものと并しあり  
みたりかきしき女の気だてるればおのほりら  
修成候もこしら忍びきや △我作法家聖人  
の学ぶら凡人あらぬともし似せ習能所も有し工共  
思成もの似せ能と思はけつく大恥思し似せ能  
にせぐく、就乃活中、蓮人ま孫寸べしを免ま

角ニモ也教<sup>レ</sup>テとの成にくき寸まいをすべ<sup>レ</sup>或<sup>レ</sup>  
る養<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>氣を<sup>レ</sup>のぶる寸まいを<sup>レ</sup>たるとい<sup>レ</sup>ども<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>  
聖<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>あら<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>皆<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>歌<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>  
て<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>美<sup>レ</sup>食<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>この<sup>レ</sup>食<sup>レ</sup>傷<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>尚<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>  
が<sup>レ</sup>衫<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ど<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>諸<sup>レ</sup>病<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>魚<sup>レ</sup>肉<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>  
孫<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>どの<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>齒<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>え<sup>レ</sup>  
酒<sup>レ</sup>宴<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>え<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>ゆ<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>目<sup>レ</sup>鼻<sup>レ</sup>耳<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>  
か<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>或<sup>レ</sup>色<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>  
か<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>或<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>  
く<sup>レ</sup>教<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>仕<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>の  
んと<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>び<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>三<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>真<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>真<sup>レ</sup>  
孫<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>和<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>異<sup>レ</sup>國<sup>レ</sup>  
との<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>考<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>  
人<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>  
悪<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>悪<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>ど<sup>レ</sup>  
色<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>色<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>  
中<sup>レ</sup>づ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>べ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>或<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>利<sup>レ</sup>色<sup>レ</sup>欲<sup>レ</sup>ゆ<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>  
さら<sup>レ</sup>等<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>悪<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>べ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>べ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>  
或<sup>レ</sup>武<sup>レ</sup>役<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>  
れ<sup>レ</sup>目<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>通<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>独<sup>レ</sup>く

下男中玉もぐりまもむせささるるに花の中  
へくくをらさきを見んも人くのみさ  
いたるるよまもよべー梅ののし  
やうもてる陽へ葉かよるを切てし  
口場へ乗てゆかー居る小居る  
るをのりもてし見ゆかーしてら  
急ぎ打ら流絶をえりよハと  
打ちををちようするし自他ゆか  
すよふべし或は流絶を刀流居  
いやくく打えよ又八人ころし  
おけい

△下の作法家来中下まで海井へ  
よこ根り流る海流るべし或人  
の復いどあるべし或らそれ  
の年それ似合程よ自他よ  
し或大小用而雨巾おもふ月  
ち子捨るるべし或巾か  
中何あら子あし叶捨る  
べし或又ぐ書がく算用未

よき事なり申す事あり——あるら  
或れはははと申す事ありたる  
——あるにいかんかや  
ほのさいつと下のあるるべし或  
也と申す所の陰病まの陰あり  
はあくとすの陰あるま——あるに  
事なや——ある事なや  
る陰あるは——あるは  
已ある陰あるべしあるに  
あるは——あるは

五百四十七

あるはあひひ養一也

寛文九年十月廿四日

自付ト云シコシテ其役人主其下ノ痛シ香曲

至節ニ彼言上ヤウシ人悪事ノ家老ノキカスニ  
究テ此公定カタケレドモ大様此ハ人仕五本ダ

五百四十八

千三ニタラシハ可直事

一 気分ヲ不養生ノ義ヲ私ニ恨シ押モノ不

及言語ヲ不公ニ言ハス不勝ニ如後ニ守  
リ永シク公カリシニテス終ハお果モ  
是ニテ奉公ト存仁ト外ニサヤ病氣ヲ押

勤ルニ保養トナリテ大少ノ気々ハ得快然或我果  
テモ君ノレノリカリン後モナリテ其由我々テハ其由  
役ニ勤方ナリテイハツモクニ中ト本復ナキ内出  
テ大却テ快気ハハカユク人々其由ハ此ハ平イヒ

五百四十九 寛文九年 己酉 十月十九日 伊賀木下 若志 聞 若志  
可クヤト云々ヤ云々のヤ云々の

五百五十 一家ニテサムル其國ぢたトナルヨク其ヤウ  
後持ヲ不知事 爲身終始徳要

五百五十一 我ガノワル中ノイハシムルヤウニセシムル

一 我ガノヨカラシヤウニセシムルヤウニセシムル

一 万ニツキアヤニキナキナキハヤクナキナキ

ホト勤ル人ノヨキト可クヤウニセシムル

一 シタカフ輩ヨリ子カニ自由ニ云ヨキヤウニセシムル

ナキヤウニ仕人ヲヨキト可クヤウニセシムル

一 目付シツクルネトノイタミツヤメシカニシテ主人

不調法ニテイテムルヲシテ上ハシテ世々ナシニセシ

目付シツクル主人ヨリモ時ニ呼出シテモ中ハ

トケヌ運モ又要ノ出シテ人々ノ目付先家

寛文九年  
己酉  
五百五十二

老シテラシメテ可トソレニテモ在ラスハ家老立  
人ノ下シモハ大神ノ後ニ公ノ下シモ在ルハ云家老  
不ハシクモ人ノ云テモ長クモムルキテハ定テ  
トニテリ者モ人バシモ急モアルケシトモ在カ  
クシテモ以テ後ニモ急モアルケシトモ在カ  
クシテモ以テ後ニモ急モアルケシトモ在カ  
クシテモ以テ後ニモ急モアルケシトモ在カ

イサツ西リナモ多トミタリシツリ持メシ子ハ其  
子年ノキ内ニ妻女シモタセシヨリ必早ク子ヲ  
持ジイハ丈老ニテトクニシハルチカラ一テモラウモウ

身ハ早クモアルト親ノ年ハイツレトモニシケリヤキ

子ノ親ハ親モサレト人ノ親モ子モ種ニ出入ノモアル  
トミタリ物名何故ルヒサツ西リナルト思知親ノ  
邪見子ノラツレハ邪智ツヤメ老テハ子ニ任子ハシ  
ヤシ敬セン一肝要也極聖人ノモ言ノセシ尺圃  
トモホ主ハ公聖ノ勤ク我身ニラケテ可知家人ノモ  
モヒトシ親(モ子)モ朋友(モ我身)ニ勤先ノ

五百五十一  
酉九月廿一日夜繫命

食物タグル度ニ命ノ為ニ南ト思テツラフベシ何ニテ  
モゾイソ仕ツルニ息災ニナラシト思テ一学(シテ)



五百五十四  
覺

理ニシメガフシ可樂也  
人ノ心モ一ニヨリ思ハレ出ルルアリキリクメビル時

ハ何ヨリ休子タキト思フ心カク子又レビ也ホト樂  
カキトハキトシモ何人歎モナキヤウニ覺レシニ

五百五十五  
百九月廿八日

一 牙際ナルモノハ念ヲセ又テ理ニ合テ立テ本公息災  
ニ定シ動スベシ聖賢ハ不レ及ハテ多人ガノ心カク

天ノ心ニキアラシスレバ之後カサハサトスラヤヤ智光  
人ノ骨シラトテイタハシキト云モナリ主人ノ用ヲ

ヤシト主人ノ心不レ離天地ノ環ヲ離ラズカク  
而シ然ニ耳タメブウスツメ立テ又ヤウニ至ル心不レ付ハ

ワガトウブアンノ耻ニラス困果有ラシカヤスキモノ人  
トナラズモニテ合息スベシ若経ヲニキズテガルシ

初ニ立テスルシ終ニスルトアリ候クハ心ノスキナキ  
なも心ノ内ニ心根不立故ニ入トナリガメニ根ニ根ヲ

ミガキ入トナリテノ教人ヲ治メクニシト心ナクナ  
シゴリヤラシテハハタトハ生付ニテ候テモ

天火ニアハシム邪ニカテハ救セサル何病氣ガ  
スニ是天火ニアラズヤオノホドカアヒトテ凡ハ

スニ是天火ニアラズヤオノホドカアヒトテ凡ハ

五百五十六  
寛文の百九月廿八日

サキハミリカメシ又先シシタリトテ存慈シ心底ス  
ホドツクスマジキヤ又子ガフガ邪欲ト云テラス佛  
菩薩モ孰ハ有トシ凡人ハ欲欲シテ重死モツタ

ナキコト買愚人孰シコト覺シ

心底ヲツクシニガキ又レハ後ハ夢ニモモ記ナキ茲也  
シニルトニハタリニモ遊ニ度キザハサハカテテラシ  
智もアムハ心英ニルヤウニシテ人ナカニテツクシ  
我モ孰出テリルシム本智ナキ故ニ不養生多ク病

今お神田橋ノ邊ニテ百姓ヤトシホシキモ四五人侍

一 之内ニ事ノ比六ハアテリテソコ同クモノ言カウ  
バツゾフナ家カメダキ人コソリヤヒテモ因乱トイ  
ヒテカツブリシニサレヤイナヤ板モクトトニテカ  
タル其アトニ何事シカイフヤラントキニホシク是カシ

五百五十七  
酉九月初日  
一人ノ生付シ人ノ自利  
カシクニ人ナラ又モモ欲ニ我ニ付テニ見曲ナキ

シリカ又ルモノトニテハ然ニ女トリコシタルト云シモルニ  
推量ニツミニツパタルヤウナルハガニ我執ニテ煩悩ニ

モノヲ云我身ニ在理ツケテ人ノ云フイカホト為ニ尤トニ  
テモ耳ニモ更ニ不同入モ云フホトニセメテ鼻サキカ  
モ出ルナラハヨカラシニ唇ヨリ出テ人ノノ聲也人出言ハ  
ウスリニシトト思フオタムヨリ出ル故アトト云  
モノモラノツカラ火ヲトモシヨニ燃リシウツス又お  
ニテモノイハサレトモヨメシク時ニ應ジニエヤカテ顔  
色チキハ不礼歎リシラズ或ハ律儀ニシタルモノ何ヤ  
云判シテモカニシテ我ニ在理モテ判時ニ善ヨリ  
ウツシエス我トキツカニカテリルモモモ

人ノ云フイカホト又ヤウノ命アリシメノモ

終ニ云フ重宝ハヨケシ凡夫ハ大方ヤメトスルト  
是ノ用ヤウヲ有モ也

智あサハ小人ノ人歎トナリ黄金をアタメ眼耳鼻  
舌身音路以カメキトナト可思其内ニ色ニヨフ  
モノ多シ心ヨリヨリハ我トナリルシカレシト云

五百六十七 由リトニ 後ニシユルカレト也

佛法ニ鑑ヲミシシ人ノ和足ノ裏ニツツシガ氣下リ

五百六十八 西九月十日 直病ニ志養生之書

一人ノクセヲナラス一徳ニシテヨリ外モナキ  
我クセシテナラスニヨキ人ヲミテツレシニセ聖人ノイフ  
徳少クテハスルハ勿論ニ其モモ明徳ノ智有テリ  
ト凡夫ノ方ト人聖人ノイフナサバ似セ物ニテ  
却テアリ得ナル也其所ニシテ付ベシ我ニ惡リ出テ  
リニテアリメトナルモノト付合ベシモリテキトラバガ  
るモトト出合短ツテアミリハミジヤセタルモノリニバ  
アトト思ヒツリツク曲ナツルベシ大方ノ徳モノト云  
ハツツクテ一理ヲ得テハ

イソバズハスレハモト行ハル徳ヨリハル徳ナリ  
ナトハ古ヨリナトナトハロスサシ我ニ到ハル徳ナリ

ニシキモサシナシ又イツク人モク心ニハ  
アスニテト思フハ<sup>横花</sup>横花ハ嵐ウカヌ物カハ  
ト云哥モムトヤリ人ト人分有ニテ時ニホツク相應  
ニ智有ツメケホト向フハスルト思フ凡善人ノウ  
ガト凡人人ハ天地ホトカハルトニハタリトニテ遅中ニ  
理ツルニハヒタト延ル曲付ハヤキモノハ急テ得理ニ  
付明々セハシキヤウナリテスゴサ入息<sup>出</sup>息ニ付  
カヘリニテナツスベシ聖人ハモリイハズナツサムルトバ  
カリ<sup>出</sup>息ニテ凡人人ハ正理ヲ失ヌ大聖人モイカ

ホトカ出言ナサシ方卷ノ書ニトメ五メルシモ不心得  
モノ云ホシイヒイハサレルツイハヤウニハセテ一返ニ  
返ルハテ一リ拙事ナラシ

返と食物ニテ合意スレシ命ノ為ニ向極ニクズレドモ  
智者ハタリテ不遇愚者ハ或ハ不足モアラシカシ大方  
己シヤメ款トナルトキメリ丸茶用ニモ一日百粒用  
可宜シク又十粒ニテハ不足千粒ニテハ過ヤメトナルカ

五百六十四  
寛文の酉九月

能可致思  
終シモハセテ思フ天及ニ終リモハシハ亦至賢ニテ

五百六十五  
酉九月廿二日

養生始  
子ヲ病者ニテ付ルハモモ非惡縁也息災ニ生シ

本ルニ其カ不調法ニテ病人ニテハ天罰ニヤタリ  
メルニ骨折テコソノ業ニテ居樂ヲ教ハテ理ニ育  
病付ニ足リハコソコソ食スベキニテ居喰ハサヤカラ  
盗人也ヤ云故ニ食リハ公故ニ行ズルハ随理モ為業  
也不行ハ敬リ喰ハ食盗人ノ難ニヤフ(ニ作法ラニテ  
スル故ニ敬リ食ニシテノツカラ本病ニナリテ之知ニ天  
災ニヤフ也  
人之是非  
天理ナルヲシノツカラ自害也

五百六十四  
酉九月廿二日

人之是非  
天理ナルヲシノツカラ自害也

然九科人のザンリクノ其悪ヲ制札ニモ虫法人のシラス  
 ル慈悲ノ教是又天理也其一人ノ悪ヲ云テ慈悲ニ至  
 一トヨロシテナリタスケルバ是ヲ殺モ可<sup>ル</sup>ル也悪ヲ  
 人ニシラスモ他名其ヲ本ニシテ叔我食物ヲシラフ  
 め<sup>ル</sup>シク喰テ度者ニテトセフ<sup>ル</sup>シヒ<sup>テ</sup>アタラバ<sup>リ</sup>  
 ラフ<sup>ク</sup>妻<sup>ヲ</sup>用ト<sup>ス</sup>ニ<sup>テ</sup>アラス<sup>モ</sup>シ<sup>テ</sup>ユ<sup>フ</sup>メ<sup>ラ</sup>フ<sup>バ</sup>ヨ<sup>ク</sup>ア<sup>リ</sup>カ  
 シ<sup>ラ</sup>フ<sup>メ</sup>ラ<sup>フ</sup>ハ<sup>ヨ</sup>カ<sup>ル</sup>キ<sup>カ</sup>思<sup>ハ</sup>ル<sup>キ</sup>ア<sup>タ</sup>リ<sup>モ</sup>セ<sup>テ</sup>シ<sup>ヨ</sup>ク<sup>モ</sup>ア<sup>ル</sup>  
 一<sup>ニ</sup>中<sup>ト</sup>思<sup>フ</sup>フ<sup>ト</sup>ハ<sup>シ</sup>フ<sup>ヨ</sup>フ<sup>ノ</sup>用<sup>カ</sup>ガ<sup>終</sup>ル<sup>ル</sup>物<sup>名</sup>ニ<sup>度</sup>シ  
 モ<sup>ヒ</sup>行<sup>九</sup>度<sup>シ</sup>モ<sup>ヒ</sup>テ<sup>一</sup>言<sup>シ</sup>モ<sup>ハ</sup>シ<sup>ス</sup>ベ<sup>シ</sup>ユ<sup>ク</sup>諸<sup>人</sup>

アリカスノ人食スルハ食シ又スム也ヤトハシ人ツカハシス人食  
 アレリ思フハカラザル事

ヲハムハ盗ノ日傭イニシメラシ其めク行ヌ人食セバ  
 天災ニアフ也此を天ノ大ヤケニテ端的アメルニハ  
 ラテイトトナリ罰シアテラレ後ハアリカントスル共色ニ  
 差合テ不成ハ天ノ終ニ入ル也通シシコメラレテ  
 後ハ自由ニテラテオシツカフハヨキト思ハレアリクイナ  
 ラ又病出ルルハ天ノ討也此に路盗人ニ志有テ理ニ叶  
 天災ニアフハ<sup>カラ</sup>ス<sup>終</sup>ル<sup>ル</sup>仕<sup>付</sup>事<sup>ナ</sup>ク<sup>ト</sup>曲<sup>ツ</sup>事<sup>又</sup>ヤ<sup>ウ</sup>ニ  
 ス<sup>ベ</sup>シ<sup>胡</sup>子<sup>ノ</sup>困<sup>ニ</sup>食<sup>ス</sup>レ<sup>バ</sup>ハ<sup>タ</sup>ニ<sup>ラ</sup>ク<sup>ク</sup>食<sup>ヒ</sup>テ<sup>胡</sup>子<sup>故</sup>ヨ<sup>ク</sup>ニ  
 ス<sup>レ</sup>ク<sup>居</sup>テ<sup>又</sup>子<sup>甲</sup>スキ<sup>食</sup>モ<sup>又</sup>レ<sup>ハ</sup>夜<sup>中</sup>腹<sup>内</sup>困<sup>ナ</sup>ラ<sup>ズ</sup>

ヲリキニハ子ニキハ天理ヲ遠シキ又おみスルコト  
ヒトト悪キ由ツル故<sup>カガミ</sup>シモシニ天地父母トナシ  
シ以生リ清ナラウお遠スルニコリテたニ肖<sup>カガミ</sup>討<sup>カガミ</sup>アリト  
五百六十七  
百九月廿四  
無智光能  
世ニカガミ也其内ニ成就スルコトハシクキニシテ我ニシテハカガミ  
シ我身ヲ思フヤウミキチビクニ純クスリハシニナリ  
アノコトスリ多シ善ク思ハ人トハ對シハアヤキト  
ナラシ我ハ至賢ノ人ヲ知テモ我ヲセメトツモシロク  
ハ思ハテ人ニウラミユルヤウニ智あるニ我ニシテハ  
ニラズシモ智とモ純ク分<sup>カガミ</sup>肝要也  
五百六十八  
百九月廿五日  
良藥苦口  
戒心行  
五ヶ条  
善ノ果報ノ種ヲ育テ生ラシムルナクシモ吾果来ラ  
カハニモ病ニシムルナクカゴトキト思フニ果報ハ  
シフメ、孰知病ハ近ナク知ヤスシ是ニテ因果ヲ可弁

切紙添ヒテ包帛ヲ丸遠テ包タシテ上ニシテス  
テ之ニ合可越ト致シテ念<sup>カガミ</sup>ニホトニテ安シテ尺出シハ  
モシ口キ事ト存セ付シキ  
五百六十七  
百九月廿四  
無智光能  
世ニカガミ也其内ニ成就スルコトハシクキニシテ我ニシテハカガミ  
シ我身ヲ思フヤウミキチビクニ純クスリハシニナリ  
アノコトスリ多シ善ク思ハ人トハ對シハアヤキト  
ナラシ我ハ至賢ノ人ヲ知テモ我ヲセメトツモシロク  
ハ思ハテ人ニウラミユルヤウニ智あるニ我ニシテハ  
ニラズシモ智とモ純ク分<sup>カガミ</sup>肝要也  
五百六十八  
百九月廿五日  
良藥苦口  
戒心行  
五ヶ条  
善ノ果報ノ種ヲ育テ生ラシムルナクシモ吾果来ラ  
カハニモ病ニシムルナクカゴトキト思フニ果報ハ  
シフメ、孰知病ハ近ナク知ヤスシ是ニテ因果ヲ可弁

知也

善ノ報重生付タルハ。愚ニ人ニ不養生任ヌレバ不報也

善ノ果成ルニ生付行悪人ノ吉事不才却テ悪報タル

父母ヨリ達者ニ生付ラレバ不養生ノ恨カメ申也

善ノ成キタルト云テ又生付タルハ。愚ニ人ノ恨モツ、

之ニ成ルハ恨者有テ行ニアルハ大強ノ人也

修行テモ悪成ルニ悪行テモ成ルト凡夫ノ自ニハ

タルハ。似合ニ養生スルト思トモ才弱カ時ニノコニ不仕

合ニテ成ル。但顔測ゴトキカ又不養生有ニトモ當

類ノ如キ也

一悪ノモ悪モナラス修行テモ成モナラ又生付タルハ

不保養ナアレトモオツヨケシハ悪クモナラス養生ヨク

スルトト分量ノ人トノホトクアレバアチカキ修行モ

五音六律不類ノ如キ也  
寛延三年六月二日ハ中城申  
帥氣根未智恵養生

似合ニ智恵明ニチサハ忠ノ道ニモ孝慈ニモ叶テ心

祈安穩ナシト思ヒ修行ハ朝シキル子房

ヲメヒナシノミリヒシ。慎心氣ヲヤスメホトク修行

一ツシコノミ欲ニテ後ヨリシヤフルト思定テコノ悪

サフシヨリ子カヒカメシナシカキ急キ早



シ不遜ヲ延心トコホウ又ヤウニスベシニ殊ノ内分際  
ヨリ過ハ云ニ不及ナ分セヌ最ニヤスムレハ末ニトケ  
ハヤモユリたカク氣根ツクモトハツツシレハツシラケ  
万ツツカヒスコシクニトイハレ其心ニシテキカメモ能ク  
目ヲ付ツシム也

五百七十一  
寛文十一年  
壬午六月廿九日

色欲一念モシヨラハ忠孝義愛ノカケタリ  
顧身不行當

身林後遺書ヲ笑ヨリウケツトテ其家サカヘトニハ  
ナリシコトニ故ニ煩ナラスナリシコトニ家ツト口ス  
ヤウニ一會思フヌ欲ニテモ大ニトカメ有モ有ヤカ

サレハ末也ト古人モイフリシ也

五百七十二

我ヲニテカヘリニ末ツモカシヤヘ中アリルカラサレ也

子月

凡人ノ推量ハ世智日毎ニ増ス故大ニキラフクモ盲目

ノコロビタルツミサルトテ万ニモウケノ用ニセヨトイ  
杖ニテアリクトイトニモ海塔ナト杖ニテ知テシキ  
モノラサレハスイリヤリシタルトヨリシレハ聖人ノ智慧  
ニテサトルト凡人モヨキアタリオチラハサルトモ云ヘケ  
レ氏ノソナヨリナアヒケレハツバツレテモ大キナアハ  
マキトナレリ又アタルトモ長邪ハヨリ出リルモ本故  
人ノ為惠ウ我為トノ思ヒカハツテ我為ニモアラス

善書

善書ノ報ツカサルモ又急ニ報本ルモ病ノゴトト可也

善書ノ報ツカサルモ又急ニ報本ルモ病ノゴトト可也

強身トナモ不養生ノ煩ハ父母ヨリヨクウミツケタ

ルニ行ヒアシフメノ善果モ来ラデ却テ悪ニナリタル也

息火ニテハ中モ可煩モ行ヒニク在テゾヨケシヨクア

シケシハ高キハ大林ノ人也修行テモ思ツタルモ思ツ行

テモ徳ナクアリト凡夫ノ目ニハ三三九過去ニテイカタル悪

業カ善根ヲカツリシ五又ラシ又悪ノモ思モナクス結

キメラシ極其人ノ生ツリ智ホトコリ徳ハアラスラ明

徳ノ智ホトコリアラサシハ人ノ分量ノ智恵分別程ハ

ルハ去ニヨリテヨクノ業人ノ明ナル智恵ウケエテア

ラハシメキト教也徳テモ徳ナク生付ニヨルハ顔面又

一精多初精と云ふ又の精多初精と云ふ

シトテモ我宿ト替リタルヲ常ニ可心ハ或節ガハリ

或五里十里モ入ダテハ以シ物ノ要ニテ湯茶ツ

クバ又ニモ年飲食トモニ初テタブルモノ或一生ニ初テ

クバ又ニモ年飲食トモニ初テタブルモノ或一生ニ初テ

クバ又ニモ年飲食トモニ初テタブルモノ或一生ニ初テ

クバ又ニモ年飲食トモニ初テタブルモノ或一生ニ初テ

クバ又ニモ年飲食トモニ初テタブルモノ或一生ニ初テ

クバ又ニモ年飲食トモニ初テタブルモノ或一生ニ初テ

クバ又ニモ年飲食トモニ初テタブルモノ或一生ニ初テ

又ハ行とし又香シキ、文目ニ丸又音ヲ聞トモハ通  
スル又法有ニ付、ウツリカハリ、アケレハ不常生ニテ、日  
ハ三ハ入サ、ハハ習ルニ人ト智慧ノメケホト心付

五百七十四 行ヲ可老者也  
寛文十二年五月五日暮方城守目付ノ時中城中ニテ

十休ノ詠哥ニ

就慈鎮一休生死詠哥自分明審

世ノ中ハアテハコシテ子テシキニ、極其後ハ死又ルナリケリ  
世ノ中ノ人此等徒観念スベシ死又ル也ケリノ事リシツ

可老

慈鎮ノ詠哥

一 俗人ノレリカホニシテシテ又哉カテラス死又ルナリケリトハ  
途ヨリノ使口今来ラシモシガル方ニ、とこそ習ナシ不  
常生モ多ク、ツシモ多ク、たこそ科重リ来リ我不知ニ  
俄ニシホヒ来トキハ、カシニホナシ今来トモ行アケラズ  
常ニ法リトニ付ヒ、ツアケ死ヲ可待、軍ヲ見テ、矢リ  
ハダガぬキシ仕方、万ニモ既ス、ウラ、とこそ柳ニハ死ヲシ  
リメシ、ニテハナシ、シシ、ノ智慧ホト明ナシ  
又ハ食物ヲスニテハナク、布テリハル、カぬメ、方ノ業ニカ  
ヤシ、可喰、ウ、キ物ヲ好、喰ノニシト、毫髪重モ不可思、命  
シ、ツ、カ、シ、メ、又、コ、ト、一、コ、ツ、モ、バ、シ、定、メ、我、智、力、ニ、可、及、シ、事

ヲシテハソレノ知ヲ用ル者ニ當リシテハ過不及ナキヤウ  
ニ可ク用ル

一 初又ハユスルト云々吞喰フ物ニテ何處アシヨリニハユスルモノ  
コシヨリニ不潔内ハ食物ヲ冷味ノモノト知ルモノナ  
ラヒハヨシヨリニスベキ

初又イヌルニシツニモノトシテ行作可入カ用事ニ  
ダリ多クナキヤウニ分メテ夜ハ子テ食ツル心ノ夏ハ  
アツケツテ冬ハ寒クセキニテ身ノ分ニ任日トモ  
モヤキ

初又シテハソレノ日トモシクハ善ク行作ニテ其人ノ程ニ  
可ク用ルツリト云々モ勤ノ使ナレシ分ナリ不潔ノ余ツジ

ナキガめト人トニシテ彼ノ事トニ彼ナド云凡クモ愛トモ  
病ニテ早クシキテ果味ツリニシキニモアツザル也

初又其後ハ死スルニケリトイハルノ生ラハ其ノ生付  
寿命果味ツリニテハ明使ノ知ヲナリテハ行難シ似合相

應ノ知ヲナリニカキ出しツレシ格ニテ可後死スル体奇  
シ能得ハナクニシテハ其程ト知ヲ可出世智ツサリ

明カ徳儀出ルニシテハ行作ヲ以知ヲ秀テお徳ニ正  
ルニテアスト云フ不可有天地由香ノツリナリ急ナラ

スナカモ速ニシツルニ合土地ノカリツモツロクト身ニ移

五百七十五

可行者也  
立武士忠道傳子孫  
武士之忠  
志不集公急侍シヤヤ他家ノ行作ヲ可學サヤクサラ

シライテハ武士ノトウゾクシテハ上思ハ此世ノ子孫  
可傳能兼バ能馬多シ年行バー入馬シ重宝

五百七十六

身行之歌兩首  
アノカレト人ヲハイシ難波カタ我オノ上ニカユル白浪

五百七十七

人ノ上トシトモイヒテ何カセシロハニゴル山川ノ水  
一 叔イカハメノ人ツメグムキトモハ上ノシゴリツイヤスオヤヤ

五百七十八

上敬老則下益孝  
上樂施則下益寬  
上好德則下不隱  
上廉讓則下耻節  
上尊上益則下益悌  
上親賢則下釋友  
上惡貪則下耻爭

此之謂七教七教者治民之本也政教定則本正

凡上者民之表也表正則何物不正是故人君

先立仁於己然後大夫忠而士信民敦而樸

我取本教年益修之

一 ソラクモラニ今ノソルシ不知下リ扱シ梅ノ走ルルモト思フ

五百七十九  
寛永十二年三月廿一日

へんきくくへんけつハ悔し民を平ヤキカメし拙下之鏡ヨリ三

ルイヨリ可知人ノ非ヲミルモ我乃ノ悪ヨリシカラシ為ト思

べしと後之徳ニ非ヨリニテモ斗方モ悪トセハ彼若ハ徳モ

チクテ我智も直シ以て悪ラシヨリチカクシ之をテモサメテ

モ眞笑ニシラシト可王夫サアテシテ人ノ痛ト人ノ

起リ必極ニスベシ物ラハ甚也明ニ人ニ道ヨリ不可極

九方主君并人母次家本ニ親交トシテ可好極武士ヲ

メテ白功シテシ編自人ノ一ノ事ヲ辭シ決ニハ三六時中

スリ終業當ニ不夜目加此時終スリテシテ終ハシカ

夜者磨石本ニ三日トモるバ人カラ尤ホスヤリ改ベシ

婦レ版立リ不可ヨリ菩薩ノ利生方便ノ神ヲ学シハ

各おタリおモ我シタツル心アラハ我慢モテ人ヲ尤

コナシ我ハヤシヨリ上ナトシモバ明徳ノ智也可を以

日ノ我ニ今日ハ勝極ニシテ此實ニ

推量ハ智也ニツ外テモ大ナアヤニクイリヌカ

被使如搔痒

云トモアリサレバ却テサメシサレハハツカハルト云カメシ

五百八十一  
三月廿三日  
推量ハ智也ニツ外テモ大ナアヤニクイリヌカ

五百八十二  
同日  
被使如搔痒

シタヤハ子バ違ハシクハツカレハカクムトニモカリニモ其人ノ  
命ヲシテヤヤルニセトスベシト云トテカカリキリ止

下ノカキナハバヤシキリトナハシハシハカガキ

五百八十二

不養生ハ夏ノ瘧疾及冬ノ寒疾ハツキリ忘ルル也  
此疾如疴病氣ノ一ツク忘サレバ名如疴病ハ西キ  
トヨト保養シ忘ルルニキト終ニ身ニシテニツク

五百八十一  
夏ノ年春夏ノ由セヤラシ油割傷身并者其心哥ニ首

寛文十一年辛

一人毎ニ七ノイキシツキナカヤルノ好トイフ不養生ハ  
イタミニシテハ療治スヌトハツクニカシ定ニテナラシ後

天地ヨリサツカリエテ人父母ヨリウミ付ラレタル寿命ノ

果報不修得受ナラズハ不修カハ行似合ニ清保シト  
又ハ之也得生タル後ハ極悪ニ悪ハク及ニ其科ニ可

合ハシテ勿修スル也メシムベシク終上ニモヨカレカシ

ト思ハ思忠志并孝慈ノ心也

多クハアリテハニシツキナツキヤキツツソレハ

五百八十四  
九月三

慈悲ノメニシテト思人ツナキツツソレハ行スルニ  
思ハシメタル人ニシテハヤニフトナリツツカガレハ是業也

ト故人ノ教也

五  
百  
九  
十  
五  
寛  
文  
十  
七  
年

五  
百  
九  
十  
六

借  
人  
之  
智  
惠

我知ラウキ一人ノ智惠ニモツカシトスベシ入ク以主トス

心故ニ父ビ我ヨキト云ヒ又レバ人ノ云シムリト云テ身入

カメキト知ベシ智あるト云ハ我ヲ捨テ人ノ理ニ本ツク

トスルトニテアリ惠来ハ秘遠ト思ヒシテソシテスレトスレ

知ナクテ人天ヨリノ九ビキハ合点ニカテ人ノ習フ我ニラ

ズニテキテ一モハ智ナキ故ニテテテテテテテテテテテ

キト知バカテカヒカコトアルキナレトモモモモモモモ

キテ一人モ知ニテテテテテテテテテテテテテテテテ

テモカサナシハ之レカセニナクテモヨリハハ眼ガ

メテキハ智惠メテカヤカラ若クモモモモモモモモモモ

キテ一人ノ智ニモモモモモモモモモモモモモモモモ

アラハ智アハ三十大ナキガ彼ノ心モモモモモモモモ

骨ヲ折シノ内ヲシカシケシ

仙覺正宗ノ近習者ニ用ハレ付テ手ノ内ニ其ノ

シエビニテモモモモモモトハ教由此内モモモモモモモ

字ラモ又レハ人ニキメウモテテテテハ心果ナシハ心

心ニツカナラザレバ心鎮心

心ニツカナラザレバ心鎮心

心ニツカナラザレバ心鎮心

心ニツカナラザレバ心鎮心

心ニツカナラザレバ心鎮心



歌出現之或人君ノ義ハ云ニ不及居家ウハ物亦

目ニニハ心ニカスリ物ニ至ト皆アリ歌トナラズ天

地ワガクイキドソトヤイハレゲテカゾクルニ不足

然故ニソソム氣曲画カレシ何トゾ早ウ直雨矢草

ハメソ階カレシ又終曲ニ出ル全夜ノ如シ重宝シ

を云ハハ分ハノ花ス申又シハ臆病ノ花云ツキ也

ツシト若シノ求歌ノ求ム一心ヨリ發ルトト人トニ

シリナカラ色ニノ行作ツミルニ付テモ上手ムノ不

ニ減ニ拙ナリ先今日ノ身ノ上ヲニコシカレキト若シ

道ノハ心ヲ味方ニカスルハ心ヲ用ルニ付テハ

又重宝ヲ用様ニヨリ若ニセザルヤ眼ハクキラ

カナルトトハ色ヲ好シルモノニ付テハホモカシ良心ノ

ニナラズバ若クモフクシクシノガシハサニニ善ク

要ニ心カハスク骨ヲ折面白キ心地モスラニ柄身ヲ

ハナシ主人ノ次妻子女ヲシテ被宿并ニ他家ウツハ

物ニ付テモ右ノ心アリ目ヲ送メテシテ余ニ

ハナラズツリノトネノ上ヲ思慕シカレリモニガキ

樂我ト如内レ本卦ニ氣曲ヲ取年筮ニ其ハ節

トハ要義ヲ書アラハシ可守事也

五百八十九

五百九十一

九月九日

九月十日

幸慮之

悪露

本卦

年筮

可去

心ヨリ

發ル

トト

人ト

ニ

シ

リ

ナ

カ

レ

キ

文政十一年  
九月十六日

病少の時養生急クシテヤウサシニ仕ト也言云人ア

ルハ不吟味故ニ聖人ハ未病治トイフ武士ノ

上ニモ常ニ欲ヲ止ルセヨト云ニシテ病氣ニシテ

モムキタラシニシテヤハ盗人子ニヤんヤニ疾ニ

シルヤ我オチカラモシテウトハ知能ト其ト人

父レ内通ノモノコホフシテタハリ切れ多クヤモ不知ト

カリ病志ハ不仕玉ニ付乱ト思ヒ初手ヨリイソカハシク

トウブツクスルルイノ者行トモ云小欲アリトヤサム

クイナカシトシテ理ニ至ニヤラサルヤ平家繁昌

故ニハイハレ但シクモフト云ニシカラシヤシテトニ拙事也

五百九十二  
亥九月七

一人ノ腹立ハ悪鬼我ト燒身トシカクテラニ腹タズルノ故ニヤリ

モヤス形ハ家ニテニシテホムラハ火カシシ故ニヤク

家ハ我ニ家ナレトモ欲ニナキヤ欲トテモ主人ノヤリ

ヤケカハルニハナケシ民ツカスルニハサカラフクニ

自始ノ理ニセハシキハ畜類同ニシテ人ノ思ヒヤリアル

ハ人トモナサモナリ泣ク人カシガモセテ人トモナ

ハメケモ不出ハツカハルモツクフモ乃理ニ似テト多ク

ラントニカリ人ノ目利我知悉クメケホトニベシガ尊

五百九十三 寅  
ト云氏又ソレ此人ノテゼイヨル也  
九月廿日ノ朝 武士急飯  
食スル時ハ一字シモセサレ飯  
シラフルモノ由古人ノ教ト

五百九十四 辛

キノ武士ハ入ルモツノアラシ  
一果報イミシキ生付ハ悪キト云比一生ニ報三  
又モモモ報キリ生付ノ果休程ニキハシラサドモ  
眼前ニ悪キナシキ悪ノ返報ニ又ナシハ自災ナレモ  
ノ毒ヲソラフテ食傷セザルニ似タリシカルトテア  
タレモモシラサト用ハ不忠不孝トイハ思ヒ終  
シト云フハ此理ナシハ我一人ニ抱ル子孫ノ報カス  
ニシハモリカハ此理ナシハ我一人ニ抱ル子孫ノ報カス  
我ヲヨリ火燭シ不忠不孝ノ報カス

膏ノぬニ可おれキ 燭ヲ出キキツルト云比我心火ノ  
移シトモクニ火ヲ出スノ節ノ不可アリ付火スレモ  
ノモシラレ理ニ責ラシラツキ火中ノ公益也  
ヤサノ火ニテ人出キノモシラレ理ニ責ラシラツキ  
結々シテニ土花ノ心ニセスノ肝要也

心関

心と道ふはあやむかる

五百九十六 亥  
九月廿日

ツリニモ関守トテハキ物ノ人ニ  
食思ノ命繫可給  
一タベモノツキキ物ノハトテ又ハタベテ  
ヒテ不敬故自身ノ天理ニテ討アリキヲ  
タタキ悪

た物に生付ヨリ、南座ニモアタリ、度重リテアタレモ  
る度トニ及べん人ニハ若シテ又モあけお人詮後  
ことあづし人トシテあつゝ、遊路がツグヒニ合無可  
トシテ論議ありノ申シ、口々父へモノ合ツナギ

五百九十七  
宣文士  
辛

人の目利、我智、我利、可向、誠

氣曲るモノ人リモ、我トヒトシリテ、言曲リカケテ  
みちも、味をいじ、濁る、流る、河ノめし、何にモサケトモ地形

五百九十八

九月廿五日朝

智惠可和合

一我オシ、我ト不可思、父へモノ、某ト思ヒ、ウキ物、オラ、父

返ニ不可思、人ノ金銀ヲホシカラ、ヤラ、明座ノ智  
あ、ホシ、ト思、男女トナ、ノヨキ、智、ある、イカホトモ、し  
ウケ得、ト思、可思、也、ニ、キ、ウ、同、テ、モ、我、ハ、非、ナシ  
ハ、却、テ、怒、ル、モ、又、少、ノ、金、言、ト、思、一、先、行、テ、後、悔  
廣大ノ理、也、又、キ、ト、ヨリ、心、ウ、サ、メ、合、ハ、ス、ゴ、ト、理、ニ  
ナ、ル、ト、思、又、ハ、サ、ニ、テ、モ、ウ、カ、ト、不、可、作、カ、セ、キ、ト、云、ハ、イ  
ナ、ル、ト、思、返、シ、明、座、ノ、智、也、又、お、お、ん、が、ニ、テ、モ、行、モ、人、  
エ、ワ、サ、ト、云、言、ハ、ア、リ、テ、ス、長、不、毛、を、ア、タ、リ、モ、ツ、ヨ、カ、ル、キ、也

宣文士



アシクヤチガハシ商ハ不著長天地ニ倚チキイカテカヨ  
カヒヤ得アリ年ノ後ニリスト云トモカヘラニヤ、親ノ不見  
不爾トテ、ニシテ居テ、ハカゲツラキトシテ、記イカ、由ル  
ニヤ、我身ハ親ノ遺シ、神ヲガテヤ、性思、業ノ人可慎也  
寛文十一年九月廿六日朝 改我非  
賢ヲホヒリ、女ノトシ、我ガハステラキヨソノミル、アシト  
ツシク、ニモ、ニシテ、先人ノ非リ、改シノガ、此ノ後、ニ

六百一  
九月廿六日

我がアトトシ、トモヒカ、（シ）ヨリシ、（キ）也  
主取ルニモ、先物ヨリ、カテ、要渡、明、智、方、方  
智、も、ア、ラ、ガ、ニ、ニ、四、ノ、百、千、と、モ、ハ、メ、ノ、合、点、モ、可、任、レ、

人トハ付、ニ、ハ、ル、モ、内、カ、縁、組、ト、味、ト、シ、フ、ハ、子、孫、ハ、ニ、カ、サ  
カ、テ、一、ト、ウ、シ、曲、ル、ハ、一、入、大、事、ト、シ、テ、ア、ノ、テ、ス、ヨ、ソ、ノ、カ、ラ、ウ、ノ、ツ、モ、

他ノ乘、お、あ、い、ウ、カ、子、ニ、入、ニ、モ、カ、ナ、メ、ア、ノ、門、也、モ、カ、ナ、メ  
ミ、物、ソ、ク、ニ、モ、養、生、カ、メ、（海）奴、（是）ニ、（不）記  
イ、ソ、カ、シ、サ、筆、ソ、ト、メ、（追）シ、（セ）メ、ル、ニ、法、と、モ、可、（カ）シ、後、モ、

六百三  
九月廿六日

虫、此、ア、ラ、シ、カ、ル、ア、ノ、（好）カ、シ、（有）名、（有）也、  
一 物、而、人、ゴ、ト、ニ、法、（起）居、（動）静、（察）要、（可）行、

一代ノカ、ナ、メ、（其）年、（ト）ノ、カ、ナ、メ、（月）ノ、カ、ナ、メ、（日）ノ、（終）ニ、  
ノ、カ、ナ、メ、（扇）ノ、（女）也、（次）弟、（邊）愚、（人）ハ、（教）也、  
一 常、（二）ニ、（三）ノ、（次）也、（ス）レ、（ハ）ヨ、リ、（ハ）カ、（エ）ツ、（ニ）セ、（智）ム、（モ）ト、（一）ツ、（出）、  
ハ、（九）ツ、（カ）ス、（十）ツ、（ラ）ト、（ス）ル、（ノ）ニ、（テ）其、（人）ヨ、リ、（心）カ、（先）ノ、（年）ト、

六百四  
九月廿六日

ハ、（九）ツ、（カ）ス、（十）ツ、（ラ）ト、（ス）ル、（ノ）ニ、（テ）其、（人）ヨ、リ、（心）カ、（先）ノ、（年）ト、



かしは終るゝ行し又人ニ又ナル心ニ人トシワガ奇  
宜ハ徳命ニ行し又我北人トシ終極ニ人終方  
行し又上トヨラズ人并我ニ終人ト終極ニ又  
シヨクハヨナルたゝる心ガ終人ト次ニ終中我  
シカリ北ツカラスモトシ行終メニ十七ハ宜キ求ル也  
勿論西洋ノ人并我方モテシレ我ニ終終  
シラぬ方一終せトニナリナ人カニシト思テ云レ  
ウヤトキカシンアラヤニリルモ我遠ニテ終ハカ  
ガシカウメンナトニニ心カスニ思ハシメグヒセシカ  
終中ノウツリも心カスルハナリチリニヨシヨリ  
ニガウツラス又大火事シニヨク水ツクテモ相應セ  
サレハ備ス向氣相催トナリ先大方人ハ人ノ終  
ラドハ終画キナリトシ入金ツモ人ハ終民金  
リニシノ智カ向ハノ神ナシトニテウツル中ヤウチ  
常ニ終リヤヤ親ナシトラス我カ一ノ守ハ終家  
本ナルヨイハセテタヘシテ故主人内ノ志不  
行作ハ知ニリキヤヤ親ニテモ子ノ加人カ大身如程  
常リノ不知内ノ志ツカヒ思イタムトヨリ終ル内者  
主ノ心ノ又ハ主人ニ終終長尺者ヤウハ家本ニシ  
ハナリシトシ人ヲコナサレ終シニヤサ行



モノ申ハロツナル終るゝ故もニス一カラシヤ何トゾ  
 ミカント思故ニ子なり祝托又ハ終付テ教テモイ  
 ケシヤベキ一ノトハ家來ドモ我ヲ画云モ百姓  
 ノ我ヲツシルモ宝ト思テ也人ニ切をナリ民  
 我トキキ父シカモ免故ニ人并百姓ラカ不足  
 スルハ夫もた理ニテ汝多ク人我中ガヒスツキカラジ  
 エラズニトクサムクノ業ヲ以テガキ本目ヨニヤカヒ  
 ツリシキゴツノ我ヲミカシモノク人トモ思あすナ  
 ミカクシテハカキキサニコソ生ツキタラメハトカニカ  
 カハ終る一モエカシ終る終生息災ニハ心ヲおたシシ  
 ツハニモツハシノツカラ人モツキツヒヤスクニカキテモラヒ  
 我ト子テモサメテモミカシニ一度ハナニテモた入  
 神ハ不請祀祀トテロクぬハニ程ハノトクオホ水  
 一ツツル水火ノトシニテモ可ハ得ハヨリハトヒ  
 ツリサシ事ト事ト也

人ノ非ツミルモノ月ナレト身ニカサハシモリトソ  
 佛にも淋ハ慈悲ハナリトモ守ル人ナリハハハ  
 月終るニそぬ星ハハハハハハハハハハハハハハハハ  
 度のおのちハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

一ツツル水火ノトシニテモ可ハ得ハヨリハトヒ

至樂

六百六 人之至樂莫如身無病心無憂

六百七 隨理為樂

不怠与世述懷及守道古詩三首  
平直盛

六百八

かきあはれ我才につりつる月を送じしを何處ん

友原定家

いづくの風をもせばも恨まらば花のわらも花は友あ

日人

我乃をまのりて君をまのりてよもいふらるれ後者の松

人之位階と品と慮

六百九  
字交上  
辛

学文だてをりて我乃の事いひて人の非を

にくえのうして自給をこるふ城をね親子にもま

くづらせぬをまはるやうなるもの志をばはるん

用じりてシノガ智ノナキモノニナリニワシリテガクムト

キケバみツトイテ二天作ノ五ト云テヒタトワリニ

セズイふつともいひけたを又あまきり千ちがいち

ひてふら事なきがめり我乃よとらひて学文

ナガラモ大方アシリカダシ文字ハ覺タキモノ也

人ニ各別ノ高下有テ及ガレキモノ也言フニナク先教カ

ニテ合点スベシ目ト違フニテモ合点ラニヨ目ニハ二万石ク  
レシト思共ハ齒ニハ百石モイヤナルモ有ノ概ステト思ニ  
モトリエナキニアラズ又カレハタクワヘヨキタナキト思ヘ  
ドモアソビゴトニハ金銀ヲツカフ概ハ九十九不足ニテモ  
一ツヨキモアリ又九十九能テ一ツの中年申中四ツ思

意ラシモモトミヘタリ

六百年  
癸亥十月三日己ノ下刊 摘要 忘其本六ヶ条

一 徳多キ人ハ換ナキ也此ニ心人ニツレ動キナラズ惡

ニ付其本ヲ忘ハカナメシキハメサル故トアヒサツクツ也

一人ハ心強クシテ強シカラヌモ多カラシハ三十三年ハ亦ヨリ

去人ニ子サシ合点終ト忘ナリキタル足計モ責ニテ

洗キヨメテ子ベシヨエタル道ニ非トイハレテ其道ニテ

履モ脱ハカテ強シラヌクヒモ減ト思ハレ乃ハ友也

一人ノ名強クイケシニ死タル道モシタワシヤウニタシ

ナムベキフシト云ニ何モイラヌトイヘリ人ノ身持ハ仕ニクモ惡

キフタリヨキヤウニシバ我モ自由ニテ樂ニトスルヲ強ト云ニ

イラヌト云テサル梅ノ言モナキ事也

一 凡ハ法度ヲのきトモ也凡人のモテたるトハ大ニテ

子ト人ヘタリたとへ善するヲと云トモカクおも

キハハテ或ハるト本志とナリトモハハ智

ハホク通下テ智惠ハナラズ報小おもむ行ハセ

おこのかんむりせめて代の北を政るこのことなり  
よくとくよく強づけはまをむづし古玉のふ  
はそふよりさういしふふそつて思ふともぬ交平僧  
一人の智恵ついたづらとや我おんまゆり  
衣智恵りむづた人おせうらむか智恵  
の上やうち

一 百やうくおふるくして志のふおつて面白事  
へりきん夫ノイナヤ

カタクナラズカタヨラヌ常十九所公聖賢ノ面白事  
トイヘリ

出言働

六百十一  
寛文九回  
己

年秋ノ比冬来リ出次  
諸人シシヒ口メ大場ニテ談談ヲ云ニ上ノぬはる事

面白ト思フ哉モ内ニ永リタル存退屈ニ及モノハ  
ケモ剛イレス却テ為善キカヒリ替悪クニシモウ

六百十二

モ可なり常ニ終ニ過ニ可及出言者也

一 清奉公ニテモ此ノ押公不忠ク之レ作去養生ニ押カ又  
ハ清ノ事公ノ時おエモヨリ今死テ清奉公ニモ十九各

六百十三

一 別末モツバカ又押ヤリ死セル迄ヨロシカラジ  
ケイノフコトヲサモ息災ナラズ不可思

改非  
我ホキトキノ愚者他ノ非ヲミレバ我非クテシタル我非ク

ヒリト改シケレバ公用ニテ人ノ非ヲミレバ我見レシ  
一 吾人ハ鏡ノラシク現鏡ノ裏  
トク我ガをこころをく故ニ明鏡ノ如ク善惡正シク

明ナルトミヘタリ  
一 愚大モ他ノ非ヲ改メテ修リテモツリナトスレハ常ノ習

三九人ハ其ホト我非クテラフナ人亦思フナリ人ニモ氣  
ツカレシ徳ニハナリテ損ノ上ニ損ヲ重トシハツリ  
可用親方ノ志比ヨリ馬  
世カレテリ習ニテ後  
下事ニ此ハハシクアテテキ  
一 徳モノミナラシトシキテテエセヨリアシキ曲付タルノミ

後十月廿二日 覺自圖至圖  
一 徳モノミナラシトシキテテエセヨリアシキ曲付タルノミ

カキシトサシトミガキテ具シ思案ノ人ヒル所イハスヨモス  
カクモ明者ニナキ勤又別ノ曲トリツキカケハシ書シテホ  
世本ノ如クシテ子ニナリ一念モウロキテ思ハス我身ノヤ  
リシニエルヤウニ成テホリテカハテ後ハ長クシテ可明  
サレバ明徳ノ智有ニシモムカシテ人徳事ニキヤカト  
シニテ我由リ改スハ世智ノ智有ニ成テ表裏出テカ  
ルキモノモムカシス我ハニテ一主君師道親シツドノ

エーソモアナツリモ千七でじクムシツラキヨリツラキルニ

六百十九

宛文の百五十月廿七日

シモムカシシ心して書きたる

六百二十

月廿二日

一 我身ノヤヤリイテ千ワシリツリセバイカヤカヤモシロ

カリケメシ念モ我ヨシト不可思動ハ不目丸ハハ入我ヨキ

トノミシエテイ刺イカリも色ハ明使もモツラウセ先岡ヨリ

シツカニヤリテ我ハ思ひてトヒヒテミツカラクカハリク

ヒタトツラキツコヘハヤルキハカハハ非ラ改ミカシ我

シキタス苗ハシトモハナキナキナキナキナキナキナキ

ニカレシ物セシ思ヒ物教ツシ又ハ怒ル神ツシセキカセモスハ

一 愚たハニ合ニシムハハテ彼モノ為ニハテテ人成怒成悲

或退屈シ或恨或氣ツ煩内氣相モヨホサズたおテナリ

六百二十一

百十月廿三日

一 我身ノヤヤリイテ千ワシリツリセバイカヤカヤモシロ

カリケメシ念モ我ヨシト不可思動ハ不目丸ハハ入我ヨキ

トノミシエテイ刺イカリも色ハ明使もモツラウセ先岡ヨリ

シツカニヤリテ我ハ思ひてトヒヒテミツカラクカハリク

ヒタトツラキツコヘハヤルキハカハハ非ラ改ミカシ我

シキタス苗ハシトモハナキナキナキナキナキナキ

ニカレシ物セシ思ヒ物教ツシ又ハ怒ル神ツシセキカセモスハ

生人信終キハ他たて白く送りニ生シスクシヤリニシノカ

非ヲ改其夜ハ本世ト存極樂一行ハ地獄ニ為タル

カト若シニホトシ可存知也極又の音日新ニ又モク

もめせしををいシモ思フニハニヤラ子見ヒロクをハト

リニタセトツノヤカニヒテハ勤コヤカニハ我公カラ

ンカトケサシキテ思フ一ツルセシテ尺ノ事

先人ト云ハイカヤウナルモノカ人タルヤトハバト

大ニトナラハ迷ト云ハカヤウナルヲ迷ト云ハ

ヨト人れスニ如キキラハ迷ト云ハカヤウナル

ハタラバクキキ一カハ迷ト云ハカヤウナル

ノ本ヲ智ヘシ極親ノ考行ノたシク存其時人ノ

考リ有テハサニタケニたヘシ極内ノモノツカフ一

非シヤラタメヨクノ非ノ心志ムベカラズ毛以邪推

世智出バサグリ多ク他人非シ改我非シニテ遠人

体ノ知カチキ故也智カ人ト云ハ他行ハ善ヲ

子シテ親ニモ親ヨリ我身ヲ垂賢ノ行ニテ貴子ハ

カト若シニホトシ可存知也極又の音日新ニ又モク

もめせしををいシモ思フニハニヤラ子見ヒロクをハト

リニタセトツノヤカニヒテハ勤コヤカニハ我公カラ

ンカトケサシキテ思フ一ツルセシテ尺ノ事

先人ト云ハイカヤウナルモノカ人タルヤトハバト

六百廿二  
寛文十一年十四日

立席可成誠

云ソト其本シトト合点ト子テモサメテモ

武士ノ本ハ息山火セヒタト身ヲ是シ動シヤ

ノ本ヲ智ヘシ極親ノ考行ノたシク存其時人ノ

考リ有テハサニタケニたヘシ極内ノモノツカフ一

非シヤラタメヨクノ非ノ心志ムベカラズ毛以邪推

世智出バサグリ多ク他人非シ改我非シニテ遠人

体ノ知カチキ故也智カ人ト云ハ他行ハ善ヲ

子シテ親ニモ親ヨリ我身ヲ垂賢ノ行ニテ貴子ハ

カト若シニホトシ可存知也極又の音日新ニ又モク

もめせしををいシモ思フニハニヤラ子見ヒロクをハト

リニタセトツノヤカニヒテハ勤コヤカニハ我公カラ

ンカトケサシキテ思フ一ツルセシテ尺ノ事

先人ト云ハイカヤウナルモノカ人タルヤトハバト

内ノ者ヲモ我非シ改ベシ此末ノ心得カ同  
ノズルト下ノ下徒不知故ニ思ヒシラフルコトハ  
百姓朋友(モ向ニ得也)

入シコトニハ我非シ云シラスル人多ク随モハ教ラ心

安ツケシラセシカ板不足シトタルモナイハ大方公啓モモ

く此理タラシトシレバ徒矣記コヤトモシヤモヨリテ

ホノイタムコトシテヤウノハ多ク大目付ツツテカアツタ

大イタモツシラセシハ宝ナシ也モホトモナリ此面トノ巻

怒ハ才ニ定ムコトヨツテモチシラスルハメキハモチカハ又深

ノ諫議官ノ人タル者何トゾシラテ下ノ教可思事也

用テ修  
け茶ヲ我方ヨリハ通付テ不來ヤウノ事タルコトシテ

カク知人多ク教テ付届シテケルハ世ニヨリテモナルキ

イニノ節シモウニヒロケシト上ノ下不入ヨク念ヲ入シ状タル

クジモ数クニテアソコトシヒコノノ候モガハイテヤルカ

タモナリイツガシテ送テリコトニモオノ上ニモモ教ム

ケケトヤルセモナキニヨリテアサハウヤヨリテオクニハタ

ルモノカハイソカシキニ手時ヨリハ付テ通付モウセテ

サハカヤウニルニキルハ板モウツナヤハウヤヒモアルナ

ラハ何シテラヒ我徒ニナシ或シラシツメスコシノルニオノモ

入シナトハゆき直ツヤウモ在テ相ヒテソカハシのイヤ

我人ヨカラ又事ヤクト思ヒツケウツラクト日シクラス後

分ト思ヒテヨソハモナデカナハヌトノニアリ汝又ハ愛シ中ノ

六百九十三  
己



又拜仗を教ふ不知アキし果テ亦多付ハ若シノ儀スル今日  
テ亦ノをトト業行なスカラシシヨルハヨクニテツヤメテノ者  
親夫婦にヨシニミテ同家ノ内ニ居タルニ彼子も公シモ  
然レ不遂煩ト号シ私アリキナトシ心空サメニ決テ立下モ  
覺又ホドニぬモテ行買カサリナドモ多クナラサカトスルニ  
メテモツノルベクモナクテ親トモ方々堪南ト云ク人モナリ  
追掛メキトヨク常シ不奉公ニ長尺ノモ不用何年ニ  
テ云テモ不奉天付モイヤト不便ニテリ志アブナキト思  
寸節夫婦ノ者長キヤヒヨツテ昨十人カニ追放メ父ノ害シ  
メキトイハレモ追ハララシトテ此執シ能ツツラガクモフニ  
知行ノチカヒ殊火事ニ逢ハレモ及々ツトテ不務手ニテ也モ  
此ノナラテモモク家居モサビクシタルニ志ノ汚用トハ永旅カケ  
エゲクぬエヘセメテトテウカシモノシモ親一ホニモカハカリ  
ソツモスルシキトシセメテ隙ノヲニモ隙先ヨヤラセセ養生  
モハニニ人法藝モツノリカノ行困ナルモ出コカ責ツカラモ今  
ホトナシ候ナルヲトリエニモホセントテホトニツカイタルニ思曲  
ツヤタリ気ニテ心ヒヤリヨカラシ人ハトモアラシカシ我等ヨト  
キリ輩ハ候メ祈ニテハ不養生ヲシ能キハハシニテ高年ノ  
カヒ多カスント心ヒツケヒメスラニ隙ナキヲカラシトイソカシ  
キリ若シ心ハヌヤウニ立也トシ行テサハ候メハ西キアアラ

六百三十四  
家藏部  
十一月廿二日

ト思ニ我が君時後ニテシナガサヤト思ヤラシニナシ子何公仏  
ニチカリシダトニズトカテニトノたをカント志トシラシ後ナ  
キコトツシカシクハ此等面白ナリトシテ物サカイトヤラ  
ン人ノ善悪ニテラシ時分後事トニカセシ及ビ事可看ヤ也

奉公人ハ公人ト云々ト云ルバカラザル事  
家藏部  
十一月廿二日

ニシカラズ武士ト号シ所ノ百姓如家隱遁者ノ事ハ此等ト  
ニスルハ是ハハコトトシテ家ノ事トシテ者大國トシテ志上云凡欲コハ  
メテトシテ出家ハ法ヲ廢ントラバ國ヲ治ラズヤ武士モ亦ラ  
徒費人ハハニ君トシテカ(ズト古語ニテルメリ)此等ハ主(ハ)

シカヨハサヤヤ他及ナキ主人(ツカヘンハカ)カフトテ主君  
ツトリカ人却テ西主ヲ殺シトニ其國トトリタル聖法モ之  
トカウシ自由ニスルアリ物シリバトモアラシカシテ平カ我心ヨリ  
ツツリ主君ト拜シ仰奉リ其恩ヲ以テ命ヲ助イカテカ  
ラツリニ心アラシヤ人ヨリ(キ)ト(武士)奉公人ハイツモ  
奉公人ノ法ヲタテ勤メ道ノ子ノ譲リ子ナリハ養子ス  
ルカサナリトモ末期ニ及ビ奉公(道)勤メ其ノ遠ナリト  
ン者ノ世ニ如命ニメテバ顔(ガ)ラツシヤケラレタルホトノ  
恥辱ト云ニヒト也

六百三十五  
十一月廿二日

火事ノ用志トテ火ヲ不少決ニスルナリトシテ火父中所能モセ

火ノヲホリテツカシケサニ用スモナリ捨テテキツクニ  
ヌリヤテイノ火ブセモイタサテ未エ斗トリツキテ人ツヨソ  
モ火ノ用心ヲモセテ拙心ト人ツウトクノ思我身ノ火用  
心ナ中ニツクモモセテハハツテモ忘レカラフ今幼女  
一母ノ云ニ子言兼蓋赤面モタルツカヤテウカトシタ  
ルヤ火事ノト遠クヨソ外ノヤウニ用ニナラカナル  
火ノ用心ニ水ヲ用シモラフ是ラカ本ナルべし上モ止  
サル公定トシラデ止ルヨシノ思故ナラシ腹立テ徳ヲ不知

六百九十六  
室  
巳

不可救火之火

付火スルト云シ家ノ火付テサタモイ付モ思故カ付ラ  
ハ不<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>付<sup>ル</sup>ハ<sup>ハ</sup>画<sup>ノ</sup>多<sup>ク</sup>カ<sup>ラ</sup>ン<sup>ト</sup>斗<sup>心</sup>テ<sup>ラ</sup>カ<sup>ヨ</sup>リ<sup>火</sup>出<sup>ル</sup>シ<sup>在</sup>画<sup>ノ</sup>改<sup>メ</sup>ス  
キ方多シ人ノ火ツラコラセハ付火回ニテラ<sup>レ</sup>ン<sup>ニ</sup>キヤシ  
コ<sup>レ</sup>ニ<sup>キ</sup>ツ<sup>ク</sup>シ<sup>テ</sup>ス<sup>ル</sup>ハ<sup>心</sup>モ<sup>シ</sup>コ<sup>ル</sup>モ<sup>ノ</sup>キ<sup>ガ</sup>ヒ<sup>ニ</sup>タ<sup>ト</sup>イ<sup>主</sup>人<sup>ニ</sup>  
テモ先ノモノノ火ノタカフルヤウニナキ仕玉尤ニ<sup>純</sup>モ<sup>シ</sup>イ  
一尺カロキ主<sup>持</sup>親<sup>或</sup>存<sup>ノ</sup>ニ<sup>キ</sup>ニ<sup>キ</sup>或<sup>不</sup>知<sup>然</sup>付<sup>節</sup>  
ニモ有<sup>レ</sup>シ<sup>如</sup>シ<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>仁<sup>者</sup>ニ<sup>款</sup>ナ<sup>キ</sup>ト<sup>云</sup>心<sup>ヲ</sup>エ<sup>夫</sup>シ<sup>テ</sup>  
慈悲<sup>ノ</sup>心<sup>カ</sup>ハ<sup>心</sup>タル<sup>ハ</sup>一<sup>ノ</sup>ニ<sup>親</sup>ノ<sup>心</sup>也<sup>境</sup>内<sup>ハ</sup>ツ<sup>ガ</sup>ハ<sup>イ</sup>モ<sup>ア</sup>ル<sup>ニ</sup>イ<sup>ガ</sup>我<sup>ト</sup>ヲ<sup>シ</sup>レ<sup>也</sup>付<sup>難</sup>  
ア<sup>ラ</sup>シ<sup>ト</sup>云<sup>本</sup>卦<sup>ノ</sup>心<sup>ツ</sup>今<sup>夜</sup>多<sup>幻</sup>ノ<sup>ヤ</sup>ウ<sup>ニ</sup>有<sup>ツ</sup>ク<sup>ハ</sup>相<sup>ノ</sup>  
ツカナルヤナ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>純<sup>ト</sup>ア<sup>ト</sup>モ<sup>ル</sup>思<sup>ハ</sup>ル<sup>ハ</sup>ト<sup>メ</sup>今<sup>ニ</sup>

六百九十七

酉十二月二日

可悦見本卦

至テ少心得タルヤウハ清バツヨキ一カサトシジク  
ト思ヒ就ノ一ハ勿論ニ外シキ方ウカ一ツク見ユクシラニ  
人ヲゴヒシリ念ジシモ忠節孝行ト我ハ心ニ身欲ニモ  
ナルラカ是以我為徳ニシテモ一ハ忠孝慈ニモカサハ何シ  
モ師匠ノモハ悦ばシ何ホトモ多カレト願ベシ

六百八

○序

一生の内天地十一番返

寛文九己酉年

一生ノ内過ナクヤリニ仕終ガ天ノ乃タルヨク見ユクシ今念ニ  
者ニ習可行仁者ニテ歎不憎悪人ヲ起調伏心ト云付ハ  
其人令メテ老テ上ハ災難ニテテハ此過去ヨリノ因果  
ハ是非ナケレモ先ニ付ハ

一曰人ニ憎キ事アラハ此節悉歎歎勿我身ヲ顧可慎事

二曰慈悲而不憎悪人起調伏心ト一ハ思ハテ人不知聞

或其人ニサハル故是モ可成歎事

三曰財宝アルニ仍歎出テ客セトス又賊取テハ是モ

歎也國ノ争モ皆ヒトトキ事

四曰智慧秀テ譽言有者ニ其妨歎ム尤悪人ニハ天地人

普ク歎タリ朱子ノ自警ノ詩ノ内世上功名看木雁

ト有之事

五曰悪人ノ沙汰善人ノ譽ヲ云ハ過ハ是モ歎出来ル朱  
子自警言ノ詩ノ内ニ談笑慎又采龜ト有之事

六曰慈悲有テ善事ヲ行輩ハ災難ニテフニキト思共

古語ニ人多則勝天天定亦破人トイヘリ惡事アリ

トイヘ天ニモ一度ハ勝呂由ク有る也

七曰善人ハ惡人ノ氣立ヲ不知ヤウニ惡人ハ從以善人ノハダク

不知キラフ誠尤哉善ト惡トハ敵ニナル水尅火ト可心

得事

八曰恩ヲ見せ我ハ在理ト云ヘ能ラシ者之我故ニ日教人住

居シセン是モ款メテ能仁ノ道ヲ可心得事

九曰人々大形欲深故惡儀ヲクムル善ヲ進用テサカニテ

レハ急ニハスズ藤ヤダリスズ結リ惡音ヲ催ノル惡ヲ導ニモナラズ大

火スズ時ニ不應水シカケタルカメシカスズツテ真意ノ端モスズ上ルトニ

一

十曰能人ハ惡鬼着テ客シタル義有之スズ鴟鳥ノ付タラ

ニ心地モスレ板ハ付ニ不應善人ハ短命ニモアラスズ麒麟ケル為出時キ

孔子ノ言モ可聞事

十一曰惡人ハ善人ノ款善人ヲ可客亦善人ハ惡人ノ款メラズシ

凡惡人ヲ我友ニシテ善人ニシテト思心有故ニ客スルハ

希タル事

六百九十九 一 梅尾明惠上人可有様之詠

ソリカニ一切経ヲヨシニハアルスズキヨウノ六ノ字也

寛文九己酉年

帝命捨付

一 駈九十三

常命ヲ捨テ居付ラレト也

一 戊子二月十八日朝離冥利

一千八百ト思ハ清奉公シトシ為ト常心可定然信ニ

ナラント可勿ヨクハ名利ノ合点ナ可敬也

一 心ヲ信ニテ定信ノ清我身名利以可究ヤ此心可覺也是我身

一 實道其兩人ノ子ハ今朝去傍ト以上

一 夕トハ疎ニ似タル偽ハ語凡偽ハタル後ハ濃タリ凡此ニキ

ヨシ去人子凡シレテレシ

一 誠之忠置句上

一 濃ノ忠ト云フハ句ノ上ニ至テテテテテテテハモ心ヲ存

外欲シ可也

一 諸人ノ惡教不可思

一 現世安穩後生善処ト云々シ心ニシムキ人ノ他ヲシハイ

一 八付テモ多ク云々偽也偽者人ノ為ニフニテラス又サレテ悪

一 事ヲナシタル人ニモナキヲシムベキニテラサレテ悪ヲ取ナセ

一 聞人モ真ニ入故弁口ヲ以人ニ面白カラレシト思フ心ニテ口ニ

一 一カス是ツイハヤケツル火事ナキハヨトハ不祈ハ爪カリワ

一 キハヤケテケケカシト思フ心ニテハ火難ニテアキ心中ニ

事

憎人其善惡云逆者自天可報罰

一 一人ノ惡キヲ云又能ツイハ善也ノカホトナハハシ智也

一 至ラスハ善也心民一人ノノリタニニテラテ一我トワガイタニ

シノレシラサレ氏天地ヨリ報有べし終るカハリニ九ノ思ヒ

六百卅八 一言可發事 人盗人火燒亡

一人盗人火燒亡之欠ヨソワカクトニ返可唱ト去人去  
ト人盗人ニ至タレトハ名ヨリテテ相人シウツカヒテ思  
カフシト思ハルカケテトニシキテ火ハ空室ニアラサヤ用アリ

六百卅九 我モ先ハ人也我ヲカヘリニシヤト穴賢クシ  
戌二月廿九日夜 本卦年筮顧身我可書  
人ゴトニシト本卦年筮シ他クカヘラ名改義ニ本卦ヲ

以下生人内身シテモラントナハル火難ニテト申ト思フコト  
思案シモセアラハシ至テニカキシトセトスベシ扱毎歲ハ

年出テシク名調常ニニテヨリコトラス可守シトハ我保養  
了中不養生カ何タル事ニテツカハ出タルヤイカ九ノ事ニテ

食傷イメシヤ其病又ソルヤウニ毒ダチセントナリトモ  
或不勝手ナラハ何トラニ身持ト改氏ヤウノ事等シ

六百四十 常心可新事 養子東坡嫌聰明 東坡詩

人皆養子望聰明 我被聰明誤一生 只願孩兒愚且魯  
無火無難到公卿

六百四十一 三性法回

一圓成實性 一依他儀性 一遍計取習 右三性法門ト云

九天之事

天 <small>無星</small>	動	總
天 <small>北八宿</small>	星	衆
天 <small>此天</small>	星	填
天	星	歲
天	惑	熒
天	輪	日
天	白	太
天	星	辰
天	輪	月

二重云 天地悉報一念

人心生一念天地悉皆知善惡若无報乾坤必有報

大學明德新民至善是又三綱領云

論語一貫之道 孟子浩然氣 盛大流行貞

中庸 時中久又貴隱

一庸醫喻病必奪人命愚馬醫直角殺牛

右壽世保元ト云醫書見夕思崇治虛咳用瀉

肺之某而不識陰中之火動乎治虛火用降火之

某而不識相火之衰彼是等之否失類之歎

前漢文鑑主錢被鑄下知之時臣下曰土地之骨筋金銀

也然才子ノ類多堀出由富不作人民痛乱國之甚

旨諫以言上止由石鈿鉄銅銀金陵ニ年アリ位ノ能カ子

成多毛委驗在之由咄表候彼書稀不見共心得面

白先書驗置候事

誠哉金銀愛世米穀少人民可痛王城人多過群

論語一貫之道 孟子浩然氣 盛大流行貞

中庸 時中久又貴隱

一庸醫喻病必奪人命愚馬醫直角殺牛

右壽世保元ト云醫書見夕思崇治虛咳用瀉

肺之某而不識陰中之火動乎治虛火用降火之

某而不識相火之衰彼是等之否失類之歎

前漢文鑑主錢被鑄下知之時臣下曰土地之骨筋金銀

也然才子ノ類多堀出由富不作人民痛乱國之甚

旨諫以言上止由石鈿鉄銅銀金陵ニ年アリ位ノ能カ子

成多毛委驗在之由咄表候彼書稀不見共心得面

白先書驗置候事

誠哉金銀愛世米穀少人民可痛王城人多過群



居而奢故危事也依茲前漢文鑑趣尤被思候也

六百四十七

一 本草綱目廿四卷 本草綱目絶食續命 煎丸三四五度

用不及一切食事不衰情力其後如本腹中成度唐葵實用右之藥下由七十人余試而王訢

具驗有之人民飲及為時書顯置候事

六百四十八

武備志百廿七卷 軍資乘之内 武備志不燒家業一方并救鐵業三方

一 制不逢索藥 每白礬十斤皮硝五斤梔子四斤為末入水五斗

熬三五沸制在蓬索上以防兩火也

一 左慈忘年法

大豆ソキノ内三三ノパメニリノ内(通り)程モ三三ノ日合リ

禁しけ大豆ソ冷水ニテ飲カシ菓肉菜菓シタメベヤシ

初ニハソリルシニ一匹十四日ノ後ハ躰スヨヤカニ食事シ

子カビ不申

一 黃山谷蒸ノ法

黑豆貫衆一升ツ煮熟シ貫衆ヲ去テ不用大豆ヲ

ホシカハカシ毎日空腹ニ又七粒ツタメハ(ハ)菓木ノ葉枝

ツタメハ(ハ)ニ味結腹三千ト

一 劉宗仙蒸年ノ法

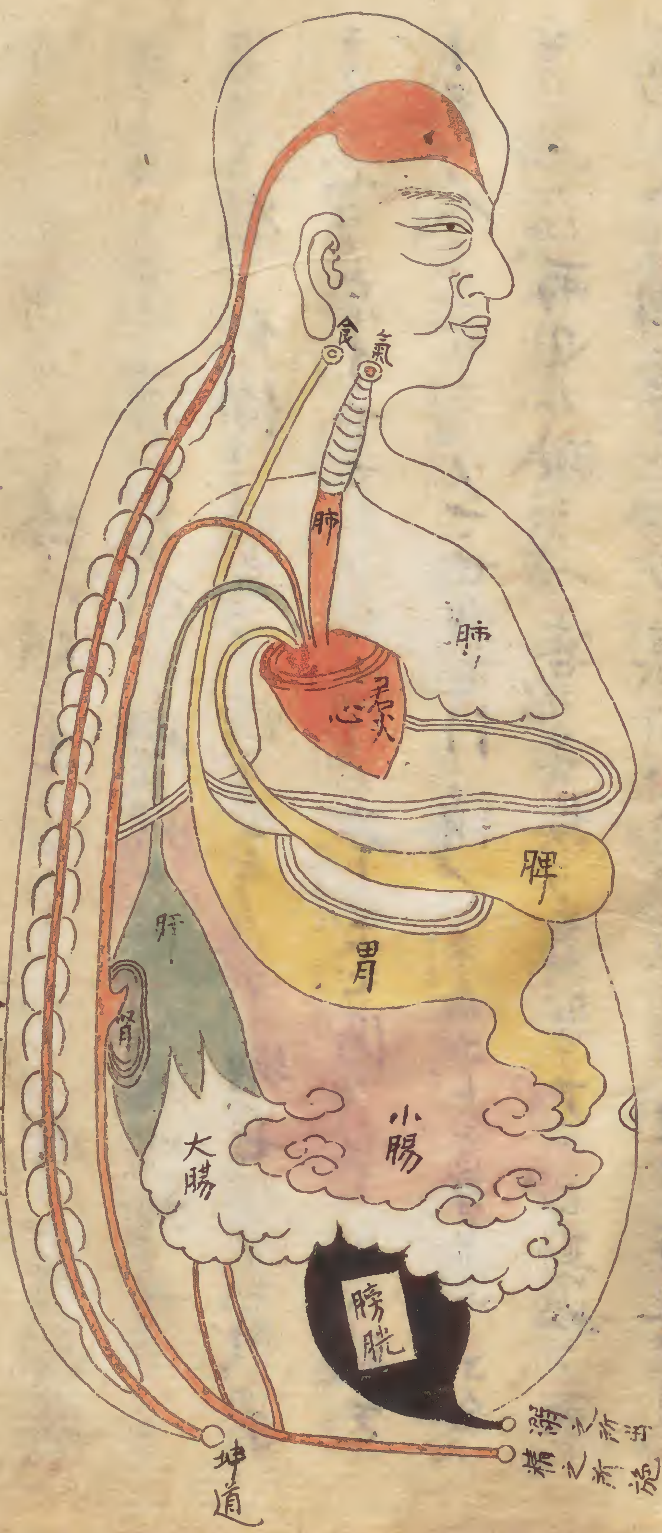
但心ニト由アタリモセサクモタリニモ不候ト也

大豆五斗洗キヨメニ交ムシ皮ヲサレ大麻子ニ汁一夜水

ニ浸シ三度ムシ皮ヲ去大豆ト可粉ヲコブシホトニ丸メ

色ノ好シク食物ヲ食フニシテ其後ハ何ニテモ心ヲ治スルハ  
五臟命給リ三焦圖法師

シキニ入夜ノミツルカワシムセツコシキヨリ丸玉シ登時分日ニ  
ホシ粉ニノ腹ニミツルホトタ(ト)一切ノ食ヲ禁ス一交タバ  
クハ七日一度ニテ四十九日ニ度ニテ三百日四交ニテ二千四  
百日ウ(不)下シバ後ハ大豆抗ハハ子凡ウユナシ神カスヤ  
カニ公トシトトカハキクハ大麻子ヲスリ湯ニテテテテ  
食物ヲ好シク交クハ(ハ)葉子ニ合粉ニテ葉ニ冷タノニシ(ハ)金  
肺 心 脾 肝 腎 命門  
大腸 小腸 胃 膽 膀胱 三焦 上中下



我身辱言國土

君火の國王也。臟腑はシカクトモカクニテ、珠ト一集國々人仁  
 玉リト主トラシメ給給知ニ主シコリシテ、宛メ屋シ高ク、緩瀝  
 錦滿シカニトシ、養食シ、ぬム乳シ、トニ、物皮物ニ付テ、ヨ  
 ヒカニ、欲ノ乳、係中、故、氣ヲ煩ノシモ、クイ物、七八分ニ用、菜  
 ニ、アブルヲ忘、イヤ、カシニ、飽滿ノ、辛主モ、肉ヲシ、イヌシ、池、を  
 ト、是、人ニ、シ、井、コ、ノ、一、世、我モ、川、清、ク、ノ、ム、ホト、身、意、ノ、未、ラ  
 シ、モ、ヤ、シ、兩、女、ノ、銀、ヲ、以、客、ヲ、モ、我、ヲ、モ、剪、テ、ナ、シ、其、如、ク、票  
 鬼、ツ、キ、テ、國、王、ト、ニ、多、集、テ、ハ、公、穀、減、ホ、ナ、ク、下、ノ、者、銀、コ、バ、ハ  
 亂、世、ニ、必、テ、亡、ハ、天、地、ノ、ウ、サ、ト、メ、其、國、其、人、ニ、應、ル、程、食、物、ア、ル、ト  
 イ、(臣、勤、臣、中、故、給、テ、自由、ヲ、ラ、ス、由、農、人、減、御、バ、諸、ノ、一、画、言、ハ、ノ、  
 振、舞、ニ、ヨ、リ、胸、ニ、ツ、カ、(思、ハ、ス、故、ク、ヒ、物、ヲ、ぬ、テ、モ、食、ウ、ト、ニ、シ、テ、是、モ  
 タ、テ、ハ、民、ノ、マ、エ、タル、也、ウ、リ、ニ、た、ハ、百、姓、減、ニ、ト、シ、此、通、ニ、在、テ、ハ、父  
 シ、ズ、ト、不、叶、及、理、也、た、振、テ、ノ、輕、テ、リ、モ、テ、行、ハ、亡、國、ノ、モ、ト、ヒ  
 タ、ル、故、ニ、是、シ、農、人、ト、是、一、足、リ、テ、人、ニ、是、ラ、テ、ハ、ト、モ、思、テ、ヒ  
 ヲ、ト、百姓、シ、カ、シ、常、ニ、油、ハ、ア、ニ、行、ク、ハ、ユ、ア、(其、趣、良  
 シ、ア、ハ、シ、ニ、不、以、耕、作、時、相、應、ニ、勤、心、ハ、ニ、ラ、ム、ハ、ウ、リ、(其、程  
 ニ、ア、ニ、ス、シ、ハ、諸、病、ヲ、モ、レ、愈、テ、ソ、ジ、キ、ク、養、食、ヨ、リ、モ、味、終、給、其  
 作、法、ノ、ス、ク、ニ、腹、ト、ニ、下、リ、ナ、バ、ウ、ル、ヲ、イ、テ、テ、火、山、火、モ、ナ、リ、ト  
 腹、中、太、平、ニ、テ、其、代、ニ、生、リ、ト、モ、カ、ラ、安、樂、成、ル、下、病、治、シ、又  
 神、靜、ニ、テ、又、勝、六、腑、其、お、ト、ニ、居、テ、法、度、シ、ミ、ク、サ、ス、君、火、ニ、シ

タカイ向かぬ命生得タル留命意身終ニ行狀改之

六百五十一 穴賢人 武士余儀六ヶ条  
巴 武士第一馬能乗亦心掛事

同カンじヤウ事一ノ事

同センギノ吐聞肝要ノ事

同メギリタルカ我身ガウ自利ハ武多 咄面白ス中

ハ似合ニキニ逢キト心得委ハ甲陽軍鑑ニ於

同心多ノ人ハ我身ガウ清用ニ立ント可思委ハ甲陽軍

鑑詮議ノ書ニ有之事

同心多ナリナモメギリタル生付ノ氣ガ受短モ也者ハシ

ニツカフ血氣ノ勇可<sup>レ</sup>有然共グセニサガ成美可<sup>レ</sup>武多

及正リカヒ<sup>レ</sup>シキモノ目キ<sup>レ</sup>下我力モ馬ニスキカシ

ビヤウツ好武<sup>レ</sup>キセ<sup>レ</sup>サリシスキ息山火成ヤウニ益取

心ガスケモノハ似合<sup>レ</sup>天ノメウリハ<sup>レ</sup>モ<sup>レ</sup>テ可<sup>レ</sup>受<sup>レ</sup>武

色<sup>レ</sup>理事

六百五十二 一忠ノ及ニモ孝行ニモ茲非<sup>レ</sup>ヲ思ニモ養生肝要ニ

弟一身ヲ清<sup>レ</sup>リ<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>シ<sup>レ</sup>勤<sup>レ</sup>シ<sup>レ</sup>欲<sup>レ</sup>ヒ<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>ナ<sup>レ</sup>氣<sup>レ</sup>シ<sup>レ</sup>不

忠<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>可用<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>了<sup>レ</sup> 敬有<sup>レ</sup>愛<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>敬<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>要

六百五十三 敬ニ愛<sup>レ</sup>アリ<sup>レ</sup>敬<sup>レ</sup>ア<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup> 敬有<sup>レ</sup>愛<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>敬<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>要

我身<sup>レ</sup>シ<sup>レ</sup>我身ト思<sup>レ</sup>ハ煩<sup>レ</sup>止<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>夫<sup>レ</sup>ハ油<sup>レ</sup>ガ<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>ハ母<sup>レ</sup>

身トモ思命シ大切ニ息災ニテカラ居テ自然ノアラス  
時清因ア為ニ命ヲスレトハケニセシテハ常ノ  
修保養ニ足リハコビ馬ケイシコノミドモ若ク武士ハ主ト

可知也 不修

六百五十四  
寛文四年四月廿二日  
在殿中書

食物多時米ト直ニ多ナセトテスハ城下ニスリスゴス  
ス必シゴリ出テ屋ヲ高シ綾羅錦繡ヲ飾養食ヲ好  
下シツイヤシシゴリツ寃及過アル道理也  
ハ附節ニシタカヒ散乱セテ不修作法

米ト本ニ多ク時ハ長ウハスサムカラ又トイハシ  
生本ルトモカフハ俄ニ若家親衣敷家セウセリホト  
食事ノ廉菜ニテ器物等モ當分ノ用ヲ達スニテサビ

シキ躰ニテハ過半ヲ善シ悪カラシ然共心静ニテサバ  
道ニモシモムカシキアハシキ世ニハ心サダキイシ  
ホシキリト思ツイヘイヤシニテ人サダキ悪キ曲ツイテソ

六百五十五  
西十二月十一日朝

ラ言ハヤリ病人モ出シト思也  
災難ニ逢ヘキハ悪ハ云ニ不及善ノリト云氏ニハカヤ  
千也人ノ事シ云モ我身ニハ合常ライハ毛頭速

テモ不若イハデモ若シカラ又ト思フイハ又カ能也  
我身ノ父母ト思シ不忘養生ニ付テモ出言ニ付テモ

身ヲソコナハヌヤウ交シナム(シタト)ハ人ニキテハル、而アラス火  
難ニアント可知ト云々、忠節ニテモ歎ヨリハ殺シトスヘシ  
方ノ内ニモソコニモ死カシルハ、油ノチクヌイ也  
中ヘン人ガウチキカ害ヲセヌモノハ歎シテアランツレモカ  
シガ悪キ一ツラミバカリシメサニ歎クヤラシヨキ口ヲ持タル故ニ

六百五十七  
歎を徒らアハ思ニモナルハ是也  
四百三十二  
悪人ソコナシサト調伏ノコトニ不曲者ヨリ用捨シテ

却テハ災難ニ逢フルベシ其故ハ我西可也ヤト是ニテ祭  
ス(シ)るナドハホ元ノヤシ生付物シテナドスヤウナル心也ハ不  
可也ナキヤトヒシラヒニテ、あか悪曲付安付ニチキハナシラシ

又ハ生付ニチリ氏古曲ハ直リ難クシテ至トスル儀シクモ是

六百五十七  
ベキ也

苦身欲可思親身

善ハ不思惡身ヲ若シムハ欲親ノ身ト可思也  
無一死ニ養生  
一モニモ養生ニタクベカラシマノ事





